

# 研究紀要

第5号

1989

財團法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

# 研 究 紀 要

第 5 号

1989

財團法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

## 目 次

- 井草式土器及び周辺の土器群について 宮崎朝雄・金子直行…… 1
- 東国における後・終末期古墳の基礎的研究(1) 田中広明・大谷 徹…… 71
- 終末期古墳出現への動態 I 田中広明……139  
——変容する在地首長層と造墓の展開——
- 古代集落遺跡の再検討 井上尚明……179  
——郡衙・郷家・一般集落——

# 東国における後・終末期古墳の基礎的研究（1）

田 中 広 明・大 谷 徹

## はじめに

- 第1章 児玉郡児玉町秋山庚申塚古墳  
第2章 行田市小見真觀寺古墳  
第3章 比企郡小川町増尾穴八幡古墳

- 第4章 比企郡滑川町羽尾岩屋塚古墳  
第5章 入間郡毛呂山町大類1号墳  
第6章 入間郡毛呂山町西戸古墳群  
第7章 茨城県猿島郡境町金岡八龍神古墳

## はじめに

6～7世紀の日本列島内の諸々の動向は、汎東アジア的世界のなかで、古代国家を模索した現象として説かれる。外政の激しい潮流は、内政へと転化し、それまでの諸矛盾を是正する動きを急速に活性化し、古代国家への歩みを與した。それは常に、6世紀來の在地首長層を基本とした上部構造を、否定せず温存させつつ結集していった。この6～7世紀に東国が果たした役割を、在地首長層の墳墓である後期古墳の変化の中に得られれば、そこに古代国家創建への道を考える糸口を探ることができよう。

そのためにまず、古墳時代後期古墳の個々の実態が、明瞭となっていることが必要である。そこで我々は、埼玉県内に所在する後期古墳のうちで、基礎資料の蓄積の乏しい6基の古墳について、基本的な資料調査を実施した。また県内の古墳との関連性のある茨城県に所在する1基の古墳についても調査を実施した。こうした作業の連続こそが、我々たるものだが東国の6～7世紀史を徐々に解明していくことと信じている。さらにこの調査を通して、諸々の問題を考えることができ、次の田中の論考は、これを綴ったものである。

なおこの調査は、昭和62年度埼玉県埋蔵文化財調査事業団研究助成を受け実施した。ただしこうした姿勢は、本稿で終了しうることはない。今後もさらに継続し、未だ資料化されず、眠れる事象に再び光りを照らすつもりである。本稿は、その第一ステップなのである。

調査に協力していただいた考古学専攻の学生諸君や、地元の市町村教育委員会の方々、そして古墳・遺物の所有者の方々には、御苦労と御迷惑をおかけしました。

昭和62年度は、墳丘調査4基（秋山庚申塚古墳・穴八幡古墳・岩屋塚古墳・大類1号墳）、埋葬主体部調査5基（秋山庚申塚古墳・小見真觀寺古墳・穴八幡古墳・岩屋塚古墳・八龍神古墳）、出土遺物調査3基（秋山庚申塚古墳・塚原2号墳・西戸9号墳）について行なった。

それぞれ、各地域で核となる古墳でありながら、資料調査が滞っていた古墳である。以下その概要を述べていきたい。



第1図 調査古墳の位置

## 第1章 児玉郡児玉町秋山庚申塚古墳

### 第1節 調査の契機

昭和33年、小沢国平氏は、崩れかけた秋山庚申塚古墳の横穴式石室の調査を行なった。これが、唯一の正式な発掘調査であり、その報告書(註1)は、永く庚申塚古墳をめぐる研究に寄与してきた。とくに胴張り型石室論では、出土遺物の豊富な年代的指標になる古墳として、多くの示唆を与えている(註2)。

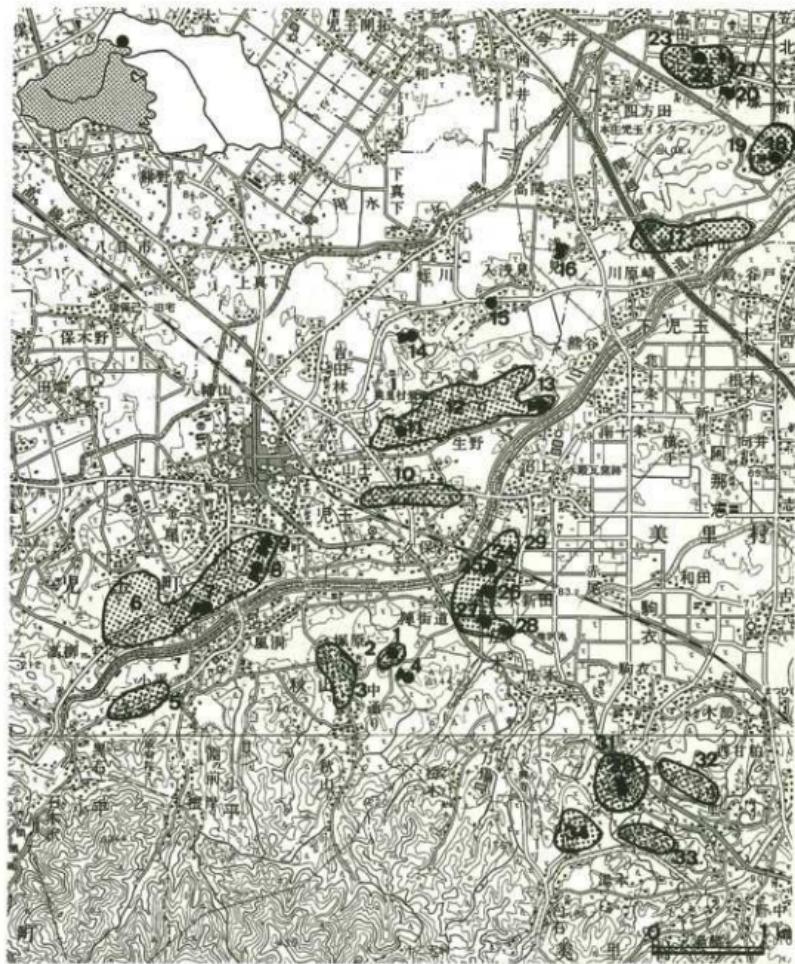
しかし小沢氏の発掘調査以前に、横穴式石室は、すでに開口されていた。金銅装の鞍が盗掘されていたことが、ごく最近まで地元では噂されていた。小沢氏の調査時には、すでに天井石は崩れ、石室内に転落していた。側壁もその大部分が崩壊し、基底部付近と羨道部などを残すだけであった。

今回の計画は、この横穴式石室を再実測していくなかで、新たな構造上の諸問題を考え、また出土遺物も同様に視点を変え再実測を行なった。現在遺物の大部分は、児玉町教育委員会が保管し、その一部(貝製雲珠・大型雲珠等)は埼玉県立博物館が保管している。また児玉町誌編纂委員会が、昭和62年に実施した周溝確認調査の結果も、児玉地方の後期古墳を考えいく上で欠くことのできない資料を提供している。

調査は、児玉町教育委員会前川由雄氏・鈴木徳雄氏に絶大な御理解を頂き、昭和63年1月15~17日の3日間行なった。横穴式石室の実測調査にあたり、犬木 努・大熊茂宏・相田美樹男・堀 宏行・井上宏孝・戸沢健二・小寺 律の各氏に調査の協力を頂いた。なお秋山庚申塚古墳の周溝調査については、児玉町誌編纂委員会から詳細な報告書の刊行が予定されている。

### 第2節 秋山庚申塚古墳の立地と周辺の歴史的環境

埼玉県で最も古代遺跡の集中する児玉地方に、秋山庚申塚古墳は所在する。南西から北東へ流れれる神流川・身飼川・女堀川・天神川・藤治川は、利根川へと注がれる。途中、山間部・台地部平野部を貫流しつつ、多くの自然堤防や後背湿地を形成し、児玉・松久丘陵から生野山・大久保山・諏訪山・山崎山を島状に分断した。



- 1.秋山庚申塚古墳 2.塚原支群 3.秋山古墳群 4.秋山諏訪山古墳 5.小平古墳群 6.長沖古墳群  
 7.十兵衛塚古墳 8.長沖25号墳 9.円満寺古墳 10.下町古墳群 11.生野山三角点古墳 12.生野山古墳群  
 13.生野山16号墳 14.鏡子塚古墳 15.金鑽神社古墳 16.鶯山古墳 17.塚本山古墳群 18.東谷古墳  
 19.前山古墳群 20.七色塚古墳 21.公卿塚古墳 22.熊野神社古墳 23.東富田古墳群 24.後山王古墳群  
 25.大町40号墳 26.大町9号墳 27.大町8号墳 28.大町両子塚古墳 29.広木大町古墳群  
 30.大仏二子塚古墳 31.大仏古墳群 32.駒衣古墳群 33.羽黒山古墳群 34.白石古墳群

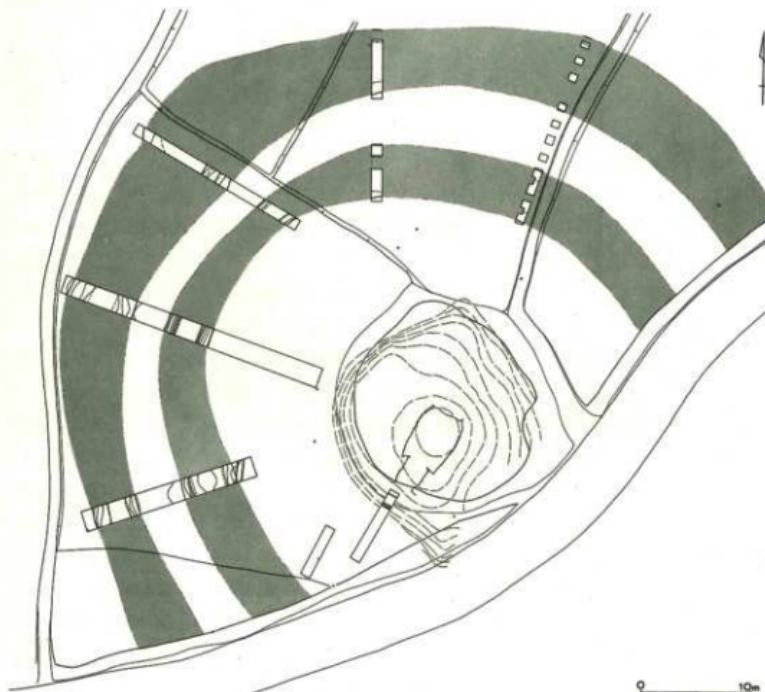
第2図 秋山庚申塚古墳周辺遺跡分布図

児玉地方は、関越自動車道・上越新幹線などの線的調査、広木大町古墳群や児玉工業団地などの面的調査が、十年来実施されてきた。にもかかわらず、5世紀以前の遺跡数は、6世紀以降のそれを圧倒する質量ではなく、そこに集落の断絶と諸事象の変化を読み取ることができる。

秋山庚申塚古墳（1）は、小山川右岸の秋山古墳群（2・3）に含まれる。小山川へ流れ込む秋山川によって形成された段丘上に位置し、その河岸段丘面ごとに支群が形成され。秋山庚申塚古墳は、塚間支群に含まれる。隣接する古墳群として広木大町古墳群（29）長沖古墳群（6）下町古墳群（10）などの大古墳群がある。また小山川を下ると、生野山古墳群（12）坂本山古墳群（17）などもあり、一連の造墓地域（群集墳）として考えることができよう。

これと対照的な天神川沿いの古墳群は、4～5基から20基前後の規模で、一つのまとまった地域に集中的に分布する。白石（34）切通・猪俣・大仏（31）駒衣（32）羽黒山（33）などの古墳群を形成する。ただ正確な調査がないため実態が不明瞭であり、その存在形態を把握することは困難である。しかし6～7世紀の古墳群の群構成を考えていく上で重要なポイントを占めている。

古墳時代の曙光は、鷺山古墳（16）に代表される前方後方墳からである（註3）。児玉地方のみな



第3図 秋山庚申塚古墳墳丘実測図

らず、関東地方の他の地域でも同様の現象形態をみることができる。とくに児玉地方では、低墳丘の前方後方墳が、多く確認されている。石菖B遺跡・南志渡川遺跡・村後B遺跡・塚本山古墳群などで確認されている諸例である。

統く5世紀代、上毛野に巨大前方後円墳が構築された一方、児玉地方では、20~30m程度の円墳が、主体的な墓制として成立した。前山2号墳(18)長坂古墳・長坂聖天塚古墳・川輪聖天塚古墳そして金鑓神社古墳(15)である。これらは、主要な残存丘陵上に点々と分布し、各々の首長墓系列を分析することが可能である。

6世紀に入ると、諏訪山古墳や千光寺古墳など、帆立貝式古墳が築造される。この動きは、北武藏の埼玉古墳群の成立、これと拮抗する上毛野の舟形石棺連合圓の成立に、呼応した展開と考えられる。

横穴式石室の登場は、それまでの大型古墳の造墓地域外で始まり、主要な墓制の一つとして、とくに在地首長層に受け入れられた。秋山古墳群の横穴式石室の成立もまた早い。庚申塚古墳を眺望する南の丘陵に築造された秋山諏訪山古墳は、無袖型の細長い横穴式石室で、初期横穴式石室としては関東地方では、最もボビュラーなタイプといえよう。秋山諏訪山古墳に前後する生野山16号墳は、胴張り型石室では初現的なタイプであり、これ以降の祖形となるのであろう。

秋山庚申塚古墳以降、7世紀の大型古墳は、秋山古墳群周辺では確認することはできないが、さきに上げた生野山・長沖・広木大町・塚本山に大規模な群集墳が形成されていく。

### 第3節 墳丘・外部施設について

昭和62年度児玉町誌編纂事業の一つとして行なわれた周溝調査の結果、秋山庚申塚古墳は、中堤をもった二重周溝の大型円墳であることがわかった。墳丘は、そのほとんどが失われ、とくに東側と南側は、町道建設の際に手酷く痛めつけられている。現在ではその残存墳丘は、横穴式石室の裏込めを含めた部分にかろうじて残る程度だが、昭和初期の頃は、高さが近隣の電柱ほどもあったといわれている。

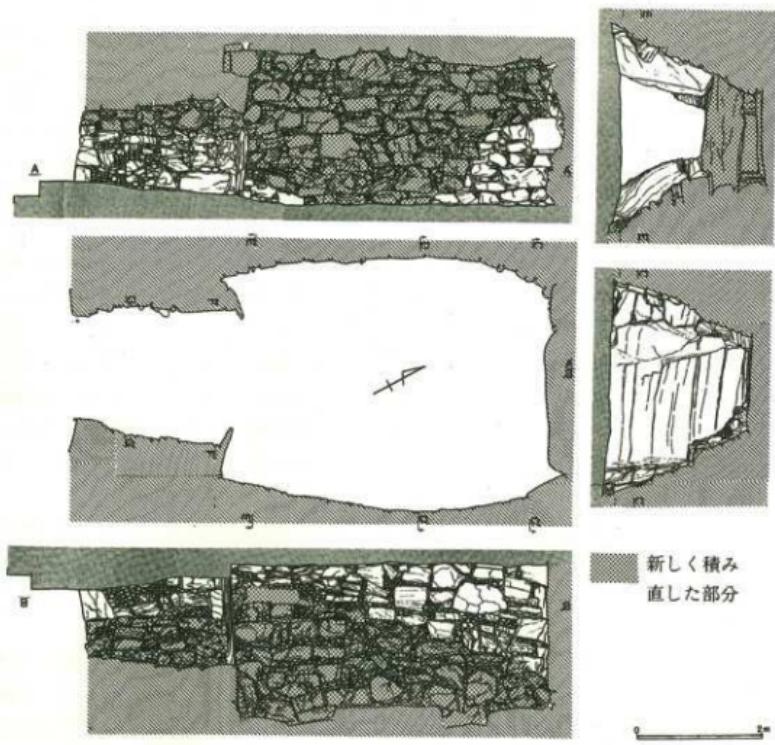
調査の結果、墳丘部は径34m、内側の周溝幅5m、中堤部の幅3.5m、外側の周溝幅6.5m、外側の縁最大径74mを測る。周溝中の内外には、全く石材を見ることができず、唯一残存墳丘縁に、人頭大の平川原石が覆土中に混入しているだけであった。おそらく墳丘全てを被覆した葺石ではなく、横穴式石室構築時に使用された石材(裏込石)の一部であろう。

埴輪は、円筒埴輪・形象埴輪とも確認されている。しかし全体像をうかがえる破片はなく、総個体数もそれほど多くない。周溝中に浮いた状態で出土し、樹立された痕跡は、確認されてはいないが、墳丘部にかなり開いたピッチで樹立されていたと考えられる。

墳丘の中央やや南寄り、旧地表より一段高い所(基壇上)に、埋葬主体部が構築されている。

### 第4節 横穴式石室について

埋葬主体部は、南に開口するカーブの緩やかな、胴張り单室構造の横穴式石室である。各計測値は、一覧表に示す通りである。



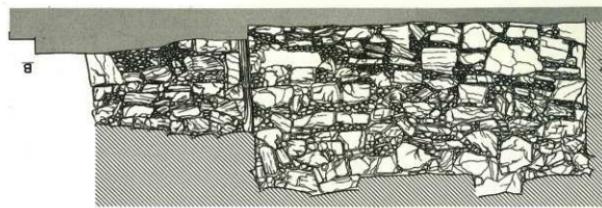
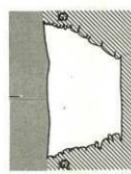
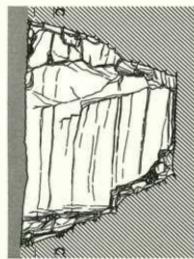
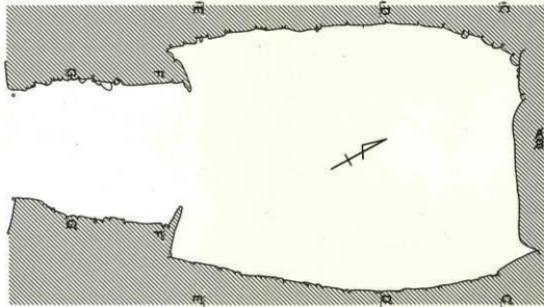
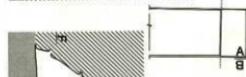
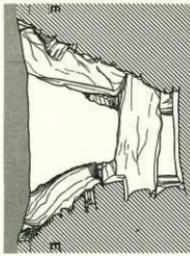
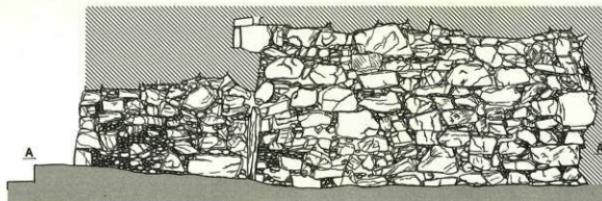
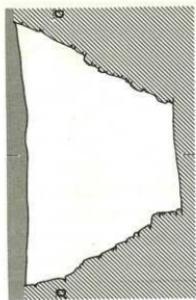
第4図 秋山庚申塚古墳の横穴式石室の復元部分

昭和33年の発掘調査後、側壁のほとんどが復旧され、現在の姿になっている（第4図）。

奥壁は、一枚石で構成される所謂「鏡石」で、水平方向に筋理の走る結晶片岩系の巨石を使用している。鏡石の左脇下は、大型の部材を置き隙間を埋めている。側壁は、玄室・羨道ともに牛頭大の石（礫）を軸に、その周囲に細長い擂粉木状の川原石を充填した「模様積み石室」を構成する。中心となる石材には、結晶片岩系の石が使用され、充填材としては、結晶片岩か緑泥片岩系の石材を使用している。立面構造上は、礫の面から擂粉木状の川原石が、突出しないように積まれている。これは、後述するが、藤岡市の模様積み石室とは、異なった架構法があったことをうかがわせる。

玄門は、緑泥片岩の板石を使用した扁平な玄門である。冠石と接する面などの細部には、細かい加工の痕跡を認めることができるが、風化が激しく、基本的な調整痕等はみられない。羨門部は、門構造をとらないが、人頭大の石を縦列に並べることによって、墳丘と埋葬部を区画している。石室底面には、犬頭大の川原石が多数あり、綿貫觀音山古墳のような棺床を推測させる。

開口方向は、N-29°-Wを向いている。



0 2m

第5図 秋山庚申塚古墳横穴式石室実測図

なお復元工事の際、玄門上部に明かり取りの窓が設定され、羨道前にコンクリートによって階段状の施設が造られていた。

全長	玄室長	玄室奥幅	玄室中幅	玄室前幅	玄室高	羨道長	羨道奥幅	羨道前幅	玄門幅	玄門高	入口高
7.72m	5.56m	3.13m	4.05m	3.25m	2.04m	2.67m	2.20m	1.67m	1.73m	1.43m	1.14m

#### 第5節 出土遺物について

昭和33年の調査の際、玄室内部から鉄地金銅張雲珠1、貝製雲珠1、辻金具・紙留金具・引手などの馬具断片多数、鐵鎌34、大刀2、鐸1、刀子1、鐵製飾弓金具8、耳環6、勾玉6、玉類（丸玉・小玉・白玉・管玉約120）などの豊富な遺物が出土している。今回、児玉町教育委員会の御配慮により、それらの出土遺物の再実測調査の機会を与えていただいた。その内容については周溝確認調査報告書に、併せて掲載することを予定しているため、ここではその概要についてのみ記すことを御寛怒願いたい。

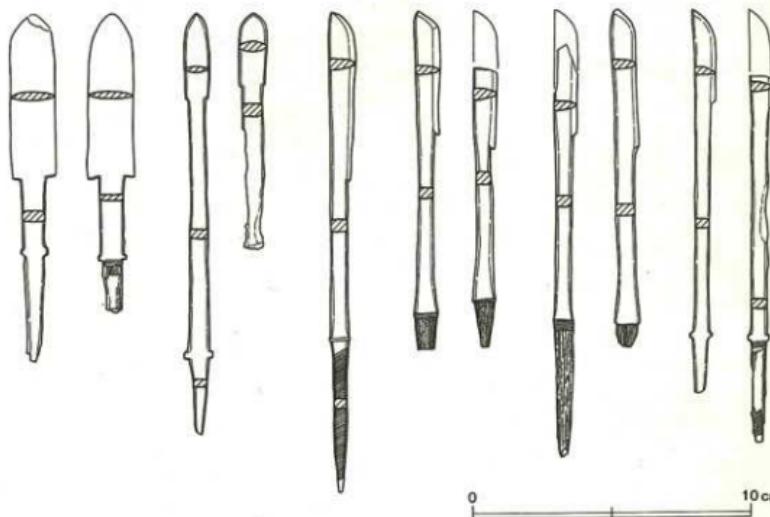
現在確認される出土遺物の種類と数量は次のとおりである。

馬具…鉄地金銅張雲珠1、貝製雲珠1、鐵地金銅張辻金具3、鐵地金銅張板状辻金具3、鞍金具1、

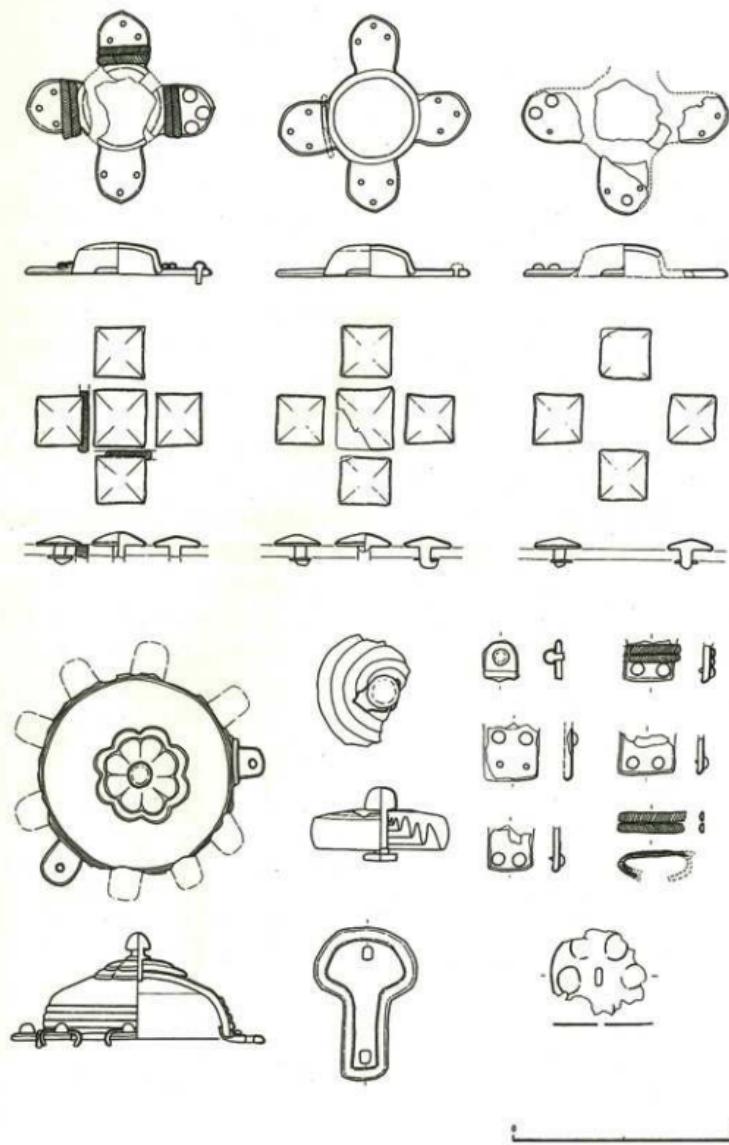
飾金具1、鞍金具（？）破片1

鐵鎌…短頸棘箆被兩丸造長三角形式2、長頸棘箆被兩丸造鑿箭式5、長頸棘箆被平刃片刃箭式13

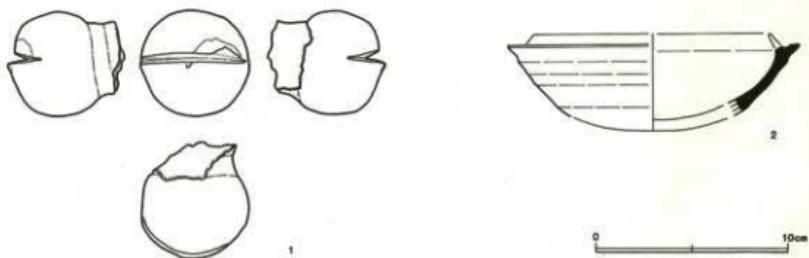
鉄刀…直刀片4、鐸4（八窓2・六窓1・無窓1）、鐵製鍔2、鐵製鞘尻金具2、金銅製責金具1、



第6図 秋山庚申塚古墳鐵鎌



第7図 秋山庚申塚古墳馬具（関・宮代 1988より）



第8図 秋山庚申塚古墳周溝出土遺物

### 刀子片 5

### 弓金具…鉄製飾弓金具 8

装身具…耳環 9 (金環 3・銀環 4・鉄環 2)、勾玉 6 (瑪瑙製 5・碧玉製 1)、碧玉製管玉 1、同破片 1、滑石製白玉 1、ガラス製丸玉 58、土製丸玉 9、ガラス製小玉 78

先の報告の内容と対照してみると概ね一致しているものの、明らかに異同の認められるものが混在している。その原因については現在検討中である。最近、関 義則・宮代栄一氏によって県内の馬具出土古墳の様相がまとめられ秋山庚申塚古墳の馬具について分析が行なわれている(註4)。それによると鉄地金銅張雲珠がTK43型式期、辻金具がTK10~TK43型式期、貝製雲珠がTK209型式期、板状辻金具がMT85~TK43型式期の時にそれぞれ位置付けられている。このうち辻金具と板状辻金具がセットとなる可能性が大きく、雲珠・貝製雲珠については現存する部品と組み合わさるものとは考え難いとして3組の馬具が副葬されていた可能性が強いとしている。その変遷は辻金具・板状辻金具→雲珠→貝製雲珠という順序を想定し、当初埋葬の時期はTK43ないしMT85型式期に遡るものと推定している(第7図)。鉄蘇の様相は片刃箭式に属するものが、蘇身部の形状・長さ、頸部の長さ、棘範被の形状等の差異から少なくとも4種類ほどに分類され、時期差を反映しているものと推定される(第6図)。これは耳環のセット関係から3~4人の被葬者が想定されていることからもわかるように、かなり長期間に亘って追葬が行なわれていたのであろう。3点出土している金環のうち1点は中空のもので注目される。県内では小見真觀寺古墳出土の中空式金環2点と鴻巣市淹馬室字中間氷川神社境内出土の中空銅環1点などしかなく僅少である。

昭和62年に実施した周溝確認調査では原位置を保つものはなかったが内・外両方の周溝から埴輪が出土しており、中堤上にも埴輪列が存在していたようである。円筒埴輪は2条突帯をもつものを主体とし、叩き等の底部調整されたものは含まれていない。胎土・調整等の特徴から少なくとも2種類以上に分類可能であり、今後周辺地域の埴輪窯との需給関係が問題となってくる。整理が進めば、児玉地方の埴輪消滅期の基準資料になるものと思われる。また少量であるが形象埴輪片も出土しており、大型の馬鈴(第8図1)が見られる。他に須恵器环(第8図2)・壺等の破片が出土している。

(田中・大谷)

《註》

- 1 小沢国平『児玉町庚申塚古墳発掘調査記録』児玉町教育委員会 1958年
- 2 菅谷浩之ほか『長沖古墳群』児玉町教育委員会 1980年  
山崎 武「胴張り石室の平面企画の検討」「土曜考古」第2号 1980年
- 3 増田逸朗「北武藏における横穴式石室の変遷」「信濃」第29巻7号 1977年
- 4 埼玉県史編さん室『埼玉県古式古墳調査報告書』 1896年
- 5 間 義則・宮代栄一「県内出土の古墳時代の馬具」「埼玉県立博物館紀要」第14号 1988年

## 第2章 行田市小見真觀寺古墳

### 第1節 調査の契機

今回、行田市小見に所在する真觀寺古墳の埋葬主体部を調査したのは、この古墳が、出土遺物から6世紀末の年代が与えられる大型の前方後円墳であること。しかも埼玉古墳群の動向と、緊密な関係にありながら、逆に実態に不明瞭な部分が多くあった。また埋葬主体部の保存状態もよく、後・終末期古墳を考えいく上で重要と考えられたからである。

調査は、行田市教育委員会・小見真觀寺の了承のもとに昭和63年1月9・10日の両日、二つの埋葬主体部の実測調査を行なった。

なお実測調査にあたって、犬木 努・中山浩彦・藤田貴美江・渡辺咲子の協力を得て遂行できた。ここでは、調査の概要と若干の所見を記し、まとめを穴八幡古墳とともにに行ないたい。

### 第2節 小見真觀寺古墳をめぐる從来の研究

小見真觀寺古墳の埋葬主体部は、寺伝によると寛永13(1636)年に觀音堂の建設のために墳丘の一部を掘削した際に、露出したとされている。『新編武藏風土記稿』にも「此堂の後の方小高き所に八尺四方の岩窟あり、寛永年中そこより開山の碑を掘出せしといまも存せり、青き板碑にて全面に金剛口子瀧慈鏡阿門梨口口菩提口口口仁治三(1242)年八月彼岸第三番と掘れり。」と記されており(註1)、鎌倉時代の板碑が、出土したことがわかる。またこのときの出土遺物として真觀寺に保存されている茶釜・銅製水差錫茶碗は、室町時代以降の製品である(註2)。

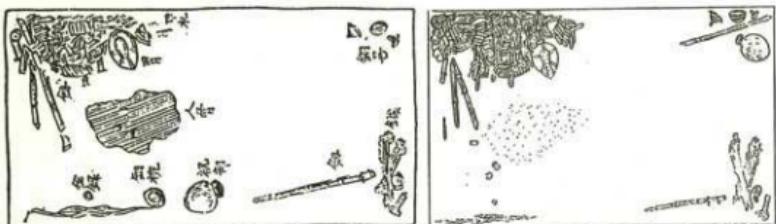
また『増補忍名所図会』にも「觀音堂の脇より入る。方八尺四面悉く青き一枚石にて疊む其中に入り口あり堅三尺横二尺、此内方八尺四面をなして青石にて疊む、石地蔵を安置す。……境内に昔より丘塚あり、寛永の頃是を掘り取て土階を築かんとするに、土中に一つの石篋を掘得たり。大きさ八・九人を入容べし。其形石を疊み櫃の如し。」とある(註3)。

あるいは『北武八志』には、「觀音墳 小見村觀音堂の背荷あり。車塚にして高二丈余周囲三町もあり。南面して上下四方九尺位の各面一岩を以て構えし石櫛あり。是は、文化年中發掘せし者にして内より腰椀の朽屑かと思はるる者と金椀菊花草ある者とを出せりといふ。而して明治十三年の春、其東面に一棺を発見せり、骨瓶・甲冑・鐵鎌・金環・金装刀等を出し今現に東京帝室博物館にあり。」と記されている(註4)。

少なくとも中世には、一度後円部石室は開口しており、それがある時期に再び埋没しさらに寛永年間に開口したと思われる。しかし小見真觀寺古墳が注目されるのは、やはりくびれ部に存在する埋葬主体部が開口した明治13年以降であろう。

坪井正五郎氏は、明治31年12月「常陸國新治郡瓦会村の古墳」(註5)を紹介するなかで、兜塚古墳と小見真觀寺古墳を比較している。氏の記述をもととして大野延太郎氏は、翌明治32年3月に『東京人類学会誌』156号(註6)に詳述されている。

ここで掲載された「石棺中遺物配置の図」は、調査時の図を転写したとされているが、『考古学雑誌』2卷第7号に付記された「内部遺物配列図」とはいくつかの相違点がある(第9図)。



「石棺中遺物配置図」 「内部遺物配列図」  
第9図 小見真觀寺古墳出土遺物配置図

四隅に集中する遺物と、中央に人骨のある基本的な構成は同じである。しかし短頸壺と思われる須恵器が、「石棺中遺物配置の図」(以下前者)では、西側中央にあるのに、「内部遺物配列図」(以下後者)では東南隅の銅鏡と一括されている。前者では、この須恵器の北側に銅鏡があるが、後者では、全く記されていない。また後者には、東南隅に大刀が描かれているが、前者ではない。細かくはまだ多くの点に疑問があるが、両者が必ずしも同一の出典より転写したとはいえない。なお後者は、博物館(帝室博物館)にあるとされるが、文部省の報告の際に行方不明となっている。

また八木柴三郎氏は『日本考古学』(註7)のなかで、前者の遺物配置図について説明を加えている。遺物については後述するが、『東京国立博物館図版目録—古墳遺物編(関東Ⅲ)ー』(註8)には、小見真觀寺古墳の遺物が掲載されている。

### 第3節 小見真觀寺古墳の立地と周辺の歴史的環境

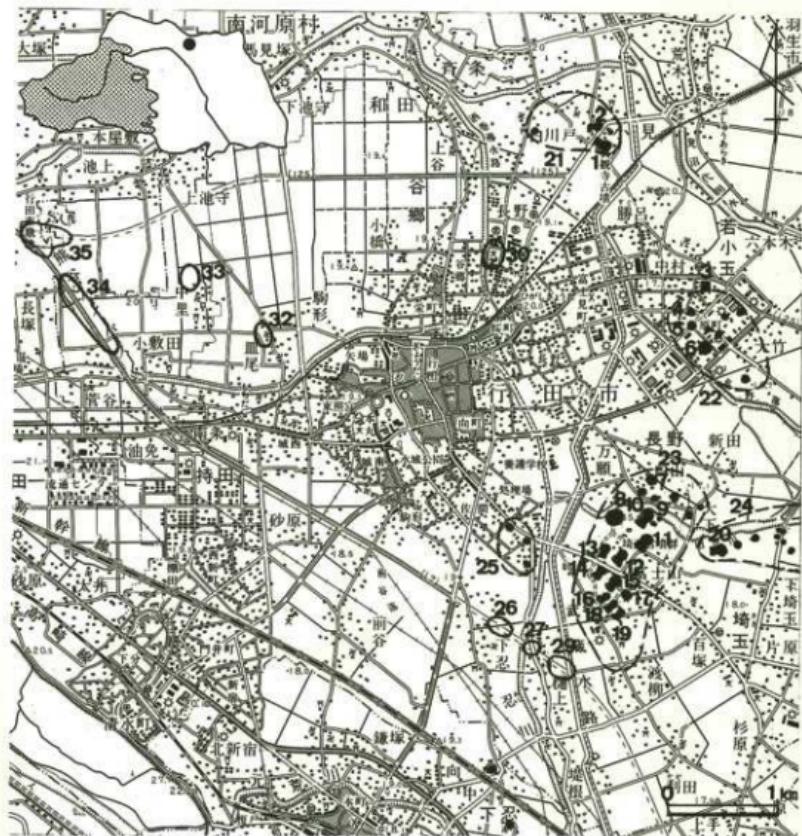
先の小見白鳥田跡(註9)の調査によると、小見真觀寺古墳の周囲は、現在でこそ眺望のきく肥沃な水田地帯が広がっているが、かつては埋没ローム台地や自然堤防を含む起伏に富んだ地形であった。小見真觀寺古墳と関わりの深い、古墳時代後期以降の遺跡について概観する。

埼玉周辺のみならず、東国の大古墳時代の大きなエポックである埼玉稻荷山古墳(9)の成立は、雄略朝前後の日本史上の重要な課題である。今のところ稻荷山古墳に先行する大型古墳は、埼玉周辺地域では確認できない。この地方の一般的な墓制は、方形周溝墓であり、その中に忽然と成立したかのようである。埼玉稻荷山古墳の成立以後は、無論埼玉古墳群の中に集中的に大型古墳が築かれていいく。近年の調査でその群構成や個々の年代などの概要が、次第にわかりつつある(註10)。

埼玉稻荷山古墳に前後する5世紀末から6世紀初頭の埼玉の周辺地域には、砾層を埋葬主体部とした50m前後の帆立貝式古墳が築かれる。熊谷市中奈良横塚山古墳・上中条鎧塚古墳・女塚1号墳あるいは太田市竜舞塚廻り1号墳などや、初期須恵器を出土した行田市大稻荷古墳も同様である。

埼玉稻荷山古墳出現以前では、吹上町袋・台2号墳や行田市佐間大日塚古墳などのように箱式石棺や粘土層を埋葬主体部とした20~30m程度の円墳が、方形周溝墓中に築かれている。埼玉古墳群では、稻荷山古墳に続き二子山古墳(12)、さらに鉄砲山古墳(15)が形成される。この段階、つまり6世紀前葉から中葉にかけて、この周辺地域では大型古墳は見出せず、埼玉政権に集約された部族連合の形成を見ることができる。

現在のところ群馬県前橋市前二子古墳や安中市篠瀬二子塚古墳に併行する段階の横穴式石室は、



1. 小見真觀寺古墳 2. 虚空藏塚古墳 3. 地藏山古墳 4. 荒神山塚古墳 5. 愛宕山塚古墳 6. 八幡山古墳 7. 白山古墳 8. 丸墓山古墳 9. 埼玉1-7号墳 10. 柳荷山古墳 11. 将軍山古墳 12. 二子山古墳 13. 愛宕山古墳 14. 瓦塚古墳 15. 鉄砲山古墳 16. 奥の山古墳 17. 前玉神社古墳 18. 中の山古墳 19. 戸戸口山古墳 20. 若王子古墳 21. 小見古墳群 22. 若小玉古墳群 23. 埼玉古墳群 24. 若王子古墳群 25. 佐間古墳群 26. 高畠遺跡 27. 武良内遺跡 28. 陣場遺跡 29. 鴻池遺跡 30. 長野中学校校庭遺跡 31. 長野神明遺跡 32. 皿尾遺跡 33. 池安中里遺跡 34. 小敷田遺跡 35. 池上遺跡

第10図 小見真觀寺古墳周辺遺跡分布図

埼玉周辺では確認されていない。最も初現的な形態である行田市酒巻2号墳は、荒川産の砾を用いた直線胴の横穴式石室として利根川沿いに成立しているのみである。

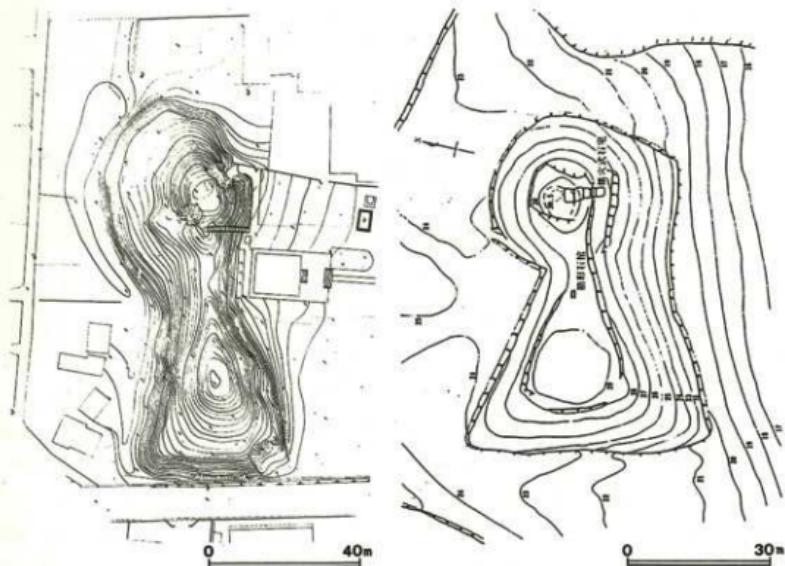
おそらく横穴式石室が大型古墳の埋葬主体部の形式として普遍化するのは、榛名山二ッ岳の爆裂に伴う火山噴出物(PFP-1)を使い始める6世紀第Ⅲ四半期以降であろう。行田市斎条1号墳・酒巻1・3号墳・白山古墳(7)・真名板高山古墳・若王子古墳(20)・小針鎧塚古墳・吹上町三島神社

古墳などが角閃石安山岩を使用した6世紀後半の大型古墳である。これらは、一様に天井石・奥壁・袖石に大形の緑泥片岩を用いている。

続く7世紀代は、行田市地蔵塚古墳（3）八幡山古墳（6）などの方墳系の古墳が築かれる。埋葬主体部は、角閃石安山岩と緑泥片岩を組み合わせ、在地の6世紀代から系譜を引く横穴式石室を構築している。この6世紀後半から7世紀にかけては、いくつかの古墳群が形成される。その一つである星川右岸の埋没ローム台地や自然堤防上に成立する小見古墳群（21）は、小見真觀寺古墳（1）を始めとして、行田市虚空藏山古墳（2）筆山古墳・天神山古墳などが現存する10~20基程度の古墳群である。虚空藏山古墳からは緑泥片岩の大石が出土したと伝えられ、現在真觀寺境内に二枚置かれている。

古墳時代後期の集落跡は、小見真觀寺古墳の東南500mにある白鳥田遺跡をはじめとして、行田市武良内遺跡（27）高畠遺跡（26）長野中学校校内遺跡（30）渡柳陣場遺跡・小針遺跡・皿尾遺跡・吹上町袋台遺跡・熊谷市中島遺跡・長安寺所在遺跡・中条遺跡群などが確認されている。それぞれ自然堤防上に形成された遺跡で、重複の著しい大規模な集落跡である。

奈良時代以降は、小見真觀寺古墳の周辺は埼玉郡に組み込まれ、近隣の自然堤防上に集落跡が営まれる。低地と自然堤防、そして河川を基盤とした律令時代的な集落が形成されていた。出土瓦の編年から、8世紀末に創建されたと考えられる旧盛徳寺の近くからは、「矢作□印」と記した大和古印が出土している。旧盛徳寺の礎石は、硬質安山岩製であり利根川流域にその採集地をみると



第11図 小見真觀寺古墳（左）と出島村風返福荷山古墳（右）墳丘実測図

ができる。

#### 第4節 墳丘・外部施設について

小見真觀寺古墳は、後円部径55m・高さ76m・前方部幅48m・高さ7m・全長112mの大型前方後円墳である。主軸は、N-45°-Wをほぼ指している。葺石は、設置されていないが、墳丘はほぼ二段に築造されている。細長く高い前方部は、やはり高く造られた後円部へとつながる。墳丘は畿内の前期古墳的な形態である。しかしこうした形態の6世紀代の古墳は、この地方ではそれほど異様ではない。菖蒲町天王山塚古墳・行田市埼玉中の山古墳などが類似し、あるいは真名板高山古墳や吹上町三島神社古墳などもその可能性があろう。

埴輪は、1片採集されているだけで、埴輪列の有無や形態など不明な点が多い。あるいはその終末的形態であれば、横穴式石室の内部や周囲にごく僅か存在する可能性はある。こうした例は、奈良県鳥塚古墳や勢野茶臼山古墳に見ることができる。

周溝は、その有無さえも現状では確認することはできない。しかし北方に隣接する虚空蔵山古墳が、前方後円墳であるとすると、おそらく周溝は、この墳丘とは、重複しない規模であろう。

墳丘の後円側の基壇部に第1埋葬主体部（横穴式石室）が構築され、くびれ部の後円部寄りに第2埋葬主体部（箱式石棺）が構築されている。

#### 第5節 埋葬主体部について

##### 〔第1埋葬主体部〕

第1埋葬主体部は、板状に節理した巨大な緑泥片岩を石材（以下板石）として、組み合わせて構築した横穴式石室である。各部の計測値は、一覧表に示す。

その構造は、現状では前後の二室の空間から構成される。しかし当初は、前室の前に羨道様の空間が付設された三室構造であったと仮定したい。

各部の接点は壁と壁との仕口であり、この部分のまとめ方が、この石室の特色を最もよく表している。各端辺はL字形に加工され、その隙間は、釘すらも差し挟むことは難しい。前後室の左右両側壁（註11）は、奥壁との接点や玄門・前門と接する部分でL字形に薄く加工され、平行方向の部材を押え込んで造られている。この工法は、横穴式石室の構築段階で墳丘の荷重（土圧）を平行方向にかけ、構築材を最も有効に使用されることにつながる。これは、従前から組み合わせ式箱式石棺が持っていた板石材の組み合わせの一技法を踏襲したと考えられる（註12）。

天井石と壁石は、壁石と壁石の仕口に比べると簡単である。それは、天井石と壁石の隙間のないように、壁石の上端を水平に加工しただけである。そして前室と後室の天井石は、全体が巨大な箱のように、玄門石を挟み込んで載せられている。

前室の左側壁は、ほかの壁と同様の緑泥片岩と、産地の違う結晶片岩系の大型石材の2石を重ね積みしている。両者は丁寧な加工で斜めに接合され僅かにズレている。おそらくこの部材は、当初天井石か敷石として調達されたが、何らかの理由で側壁材となったのであろう。その玄門は、1枚の板石材の中央を四角形に削り取って造られている。まさに墳丘土圧の横荷重を1枚石が受け止め、

第1埋葬主体部

前長	前室長	前室幅	前室高	後室長	後室幅	後室高	玄門厚	玄門幅	玄門高	全長	幅	高
5.42m	2.41m	2.24m	2.03m	2.62m	2.33m	2.02m	0.21m	0.68m	0.91m	2.80m	1.76m	1.12m

★第2埋葬主体部の奥には、腐食土が堆積していたため、数値はやや正確さに欠ける。

最も有効的に処理しているのである。

前室・後室とも床面に、1枚の敷石が設置されている。両者とも排水溝を意識してか、壁面と床面との間には、微妙な隙間（約1cm）を見る事ができる。床石のレベルは、後室床面より前室床面が15cm低い。後室床面と玄門の框が、同一レベルに造作され、これを意識していよう。

玄門開口部は、当初68cm×90.5cmの大きさでやや右寄りに造作されていた。しかし後世、後室部に観音像を安置する際、玄門を広げ観音扉様の施設を付設しようとした、現状の大きさになったらしい。工具痕については後述するが、拡張部の工具痕は、本来の工具痕と全く違い、柱部に木棒を設置するためドリルで穿孔し、そこに釘をコンクリートで固定している。この施行の衝撃で玄門左上半部が剥落し、前室部に転落し床面を変形させている。

後室の床面には、4本の幅（上）10cm（下）7cmの溝状の彫込みがあり、この部分に未知の箱式石棺か箱式木棺などを想定することが可能である。北武藏では、6世紀後葉から7世紀第Ⅰ四半期にかけて、横穴式石室の後室奥部に箱式石棺を設置する例が、いくつか確認されており、決して珍しいことではない。

開口方向は、N-11°-Eを向いており、後室の箱式棺用の彫込みはこれと直行するN-80°-Wである。

### 〔第2埋葬主体部〕

第2埋葬主体部は、緑泥片岩の板石を組み合わせて構築した箱式石棺である。従来は、北側に開口する横口式石棺、あるいは横穴式石室の特異な一形態とされていた。しかし後述の理由から、箱式石棺の一つとして結論付けることができよう。

その構造は、各面が大型の一枚石を箱形に組み合わせて構築している。現在第2埋葬主体部の直上の墳丘には、開口部と同規模の板石がある。おそらくこの板石が、明治13年に狐の出入り口となつて村民が除去した蓋石であろう。各計測値は、一覧表に示す通りである。

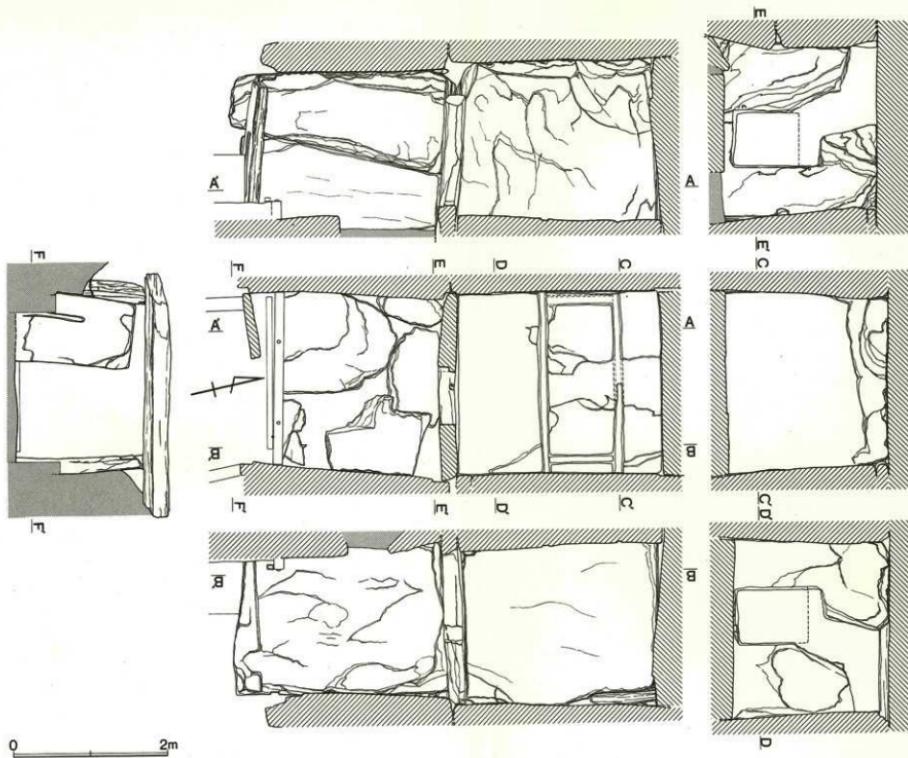
部材の接合は、第1埋葬主体部の各まとめ方に近似する点が多い。縦板材の両側端は、L字状に加工され、横板材を嵌込むように構えられる。床板は水平が保たれないが、やはり同様である。ただ天井部に二つの大きさの不揃の石を用いている点は、箱式石棺の蓋石であることを強く示す。

第1主体部も同様、縦板材は緑泥片岩の目を水平方向に使用し、横板材は垂直方向に使用している。長軸方向は、墳丘の主軸とは別で、N-50°-Eを向いている。

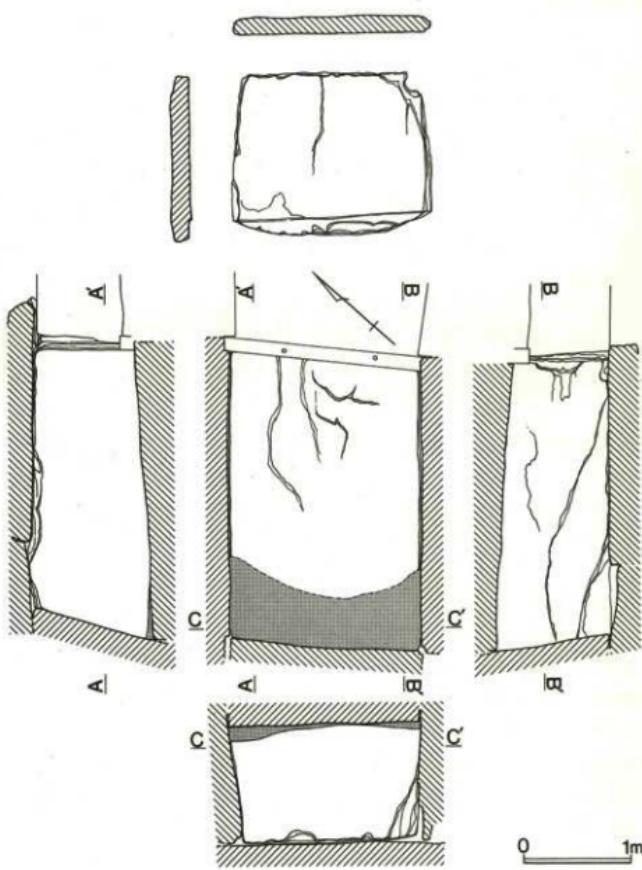
現在北壁が開口し、コンクリートによって壁石が補強されている。また床面は土砂が充満し、入り口部には階段が付設されている。

### 第6節 石材の加工技法について

横穴式石室の構築材は、その原石採集に諸形態が認められるが、大きくは転石系（自然石・川原



第12図 小見真觀寺古墳第1号墳主体部実測図



第13図 小見真觀寺古墳第2埋葬主体部実測図

石)と切出し石系に分けられる。小見真觀寺古墳の場合、荒川上流の長瀬から寄居付近までの間にその採取地を求めていたが、全て転石系とは考えられず一部には、切出し石を含んでいたであろう。

採取に適した露頭(やや傾斜のある水平面)に矢穴を穿ちクサビを打ち込む技法は、石材の自然面に矢穴痕の見られないことから否定的で、板石塔婆の出現以降と考えられている。しかしクサビは、木材の分割や工具類の縛め等すでに弥生時代以降出現している。緑泥片岩を含む硬質石材も、河川や草木の根によって軟弱化した亀裂の部分へ、クサビを打込んで割取った可能性はある。これを矢穴技法に先行する初現的剥取りの技法とし、クサビ技法と呼ぶ(註13)。



第14図 小見真觀寺古墳石材加工痕（前室右壁の入り口上隅）



第15図 小見真觀寺古墳石材加工痕（玄室右壁中央）

採取した石材は、ある程度整形され運搬されると、古墳構築現場で細部加工が施される。これを「細工」あるいは「切はめ」と呼ぶ。小見真觀寺古墳の二つの埋葬主体部は、きわめて酷似した細工が見られる。それは、次の三形態の技法である。

#### (1) 第1埋葬主体部の玄門

玄門は、第1工程の粗造りと第2工程の仕上げによって造作されている。

第1工程は、加工痕跡が仕上げ加工によって抹消されるため、工具痕からその技法を推定することは不可能である。しかしタガネ様工具を叩打する、緻密な労働を繰り返すことによって、一念岩をも通したのであろう。6世紀以降、花崗岩等のかなり硬質な石材を、貫通させたり彫り込んだりする技術の存在は、飛鳥の石造遺物や白鳳の寺院礎石などを上げるまでもなくよく知られている。

横穴式石室を組み立てる前の工作であろう。

第2工程は、粗造りされた各面を叩打具を用いて平滑化する。その仕上りは、径2~3cm程度の円形に近い凹凸として残される。この叩打痕は、石材の各端部が両者組み合う部分に観察できる。横穴式石室の組み立て階段の途中、以後にフィード・バックしながら行なったのであろう。

#### (2) 第1・2埋葬主体部側壁仕口

側壁の仕口は、L字形に薄く加工される。この部分は埋葬主体部構築後は、陰になる部分のため仕上げ加工がされず、第1工程の粗造りの様相がわかる。ただし部材の組み立て時に微調整は行なっている。いずれにせよタガネ状工具でハツリ加工を、端部から数回行なって仕口としている。

#### (3) 第1埋葬主体部側壁・奥壁の平滑化

最も視覚性の強い壁面は、余計な凹凸をタガネ状工具でハツリ加工した後、工具は特定できないが、平滑に擦った仕上げの痕跡がある。それは、1mm以下の細く長い筋状の線が、縦横不規則に見られる。

今後こうした石材の加工技法を詳細に検討していくことによって、工人の系譜や労働体制など新たな研究方向が導き出されるだろう。

#### 第7節 第2埋葬主体部の出土遺物について

現在確認しうる出土遺物は、東京国立博物館に残された明治13年に出土した一群のみである。

『東京国立博物館図版目録—古墳遺物編（関東Ⅲ）—』によってその概要がわかる。

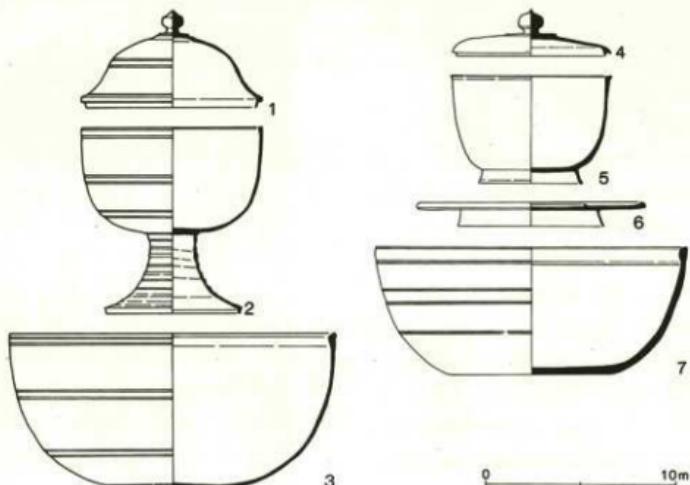
1. 金環 3点出土しており、内2点は中空で対であらう。人骨片の散らばる付近から出土しており、装着した状態であろう。
2. 刀子 鞘に装着した状態で出土している。長さ19.3cmの鉄製の刀子。圭頭式の銀製の柄頭。鍔と環付足金物が付く。
3. 圭刀大刀 全長92.5cm、身幅3.3cmの銀装大刀。柄間は、銀線の千段巻きの上に細かい草紐を粗く巻く。鍔は喰出しで、鞘口金具の切り込みに挿入する銀製の環付足金物をもつ。鞘口金具下縁に刻みをもつ銀製青金具。二ノ足も銀製で、環部は佩裏に偏る。刀身に木質が残存する。
4. 頭椎大刀 2点出土している。金銅装。鞘口以下は欠損し、現存長は18.9cm。堅畦目式で柄間金具に蕨手状文を施す。金銅製鍔は、6窓の倒卵形である。覆輪がある。一方は、一ノ足以下が欠損し、現存長38.3cm。横畦式で柄間に蕨手文を施す。金銅製の鍔は、覆輪をもつ6窓の倒卵形である。鞘口に金銅製鍔をのむ。足間金具に円文の打ち出しがある。
5. 鉄鎌 50本以上が確認されている。形式的には、棘箒被鑿箭式・片刃箭式などがみられる。
6. 挂甲小札 胴丸式挂甲1領分の小札が出土している。
7. 銅鏡 3点出土している。無台鏡は、口径17cm、高さ8cmで口縁部・胴部・底部に平行凸線2条をめぐらす。口縁部は面取りされ、底部は平底に近い。口縁内側は、やや膨らむ。毛利光分類A Ia類である。高脚付鏡は、脚と鏡は別造りである。脚に6条の凸線、口縁部に2条の凸線を施す。蓋は半球形で、その中央部に2条の平行凸線が描かれている。頂部は、円座の上に宝珠紐が付けられる。総高14.3cm、口径9.7cm。毛利光分類のA II類にあたる。

これらは、明治13年4月13日に発見され、同年12月28日に埼玉県より購入された一括資料である。このほかに須恵器などが出土していたのは、前述のとおりである。

(田中)



第16図 小見真觀寺古墳石材加工痕（玄門）



第17図 小見真觀寺古墳出土の銅鏡と風返福荷山古墳出土の銅鏡  
(1~3 小見真觀寺古墳、4~6 風返福荷山古墳、7 玉造村 浜大日山古墳)

### 〈註〉

- 1 『新編武藏風土記稿』卷216 1829年
- 2 文部省『史蹟調査報告書』第7輯 1920年
- 3 洞季香齋『増補忍名所図会』安政3年
- 4 『北武八志』歴史図書社 1907年
- 5 塙井正五郎・野中完一「常陸國新治郡瓦曾村の古墳」『東京人類学会雑誌』第14卷第153号 1898年
- 6 開口時の状況は、大野延太郎氏の報告書に詳しいので、そちらを参照していただきたい。
- 7 八木英三郎『日本考古学』1989年
- 8 『東京国立博物館図版目録—古墳遺物編（関東Ⅲ）—』東京国立博物館 1986年
- 9 木戸春夫『白鳥田遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書54集 1985年
- 10 『埼玉福荷山古墳』埼玉県教育委員会 1980年 『瓦塚古墳』埼玉県教育委員会 1986年  
『鉄砲山古墳』埼玉県教育委員会 1985年 『二子山古墳』埼玉県教育委員会 1987年  
『愛宕山古墳』埼玉県教育委員会 1985年 『丸墓丸古墳・埼玉1~7号墳・将军山古墳』1988年
- 11 ここでは、入口から奥壁をみて左右する。
- 12 5世紀末から6世紀前葉にかけて20~50m級の古墳に緑泥片岩を使用した箱式石棺が、比企・北武藏に構築された。高柳茂『寺前古墳・大道古墳』滑川町教育委員会 1986年
- 13 クサビ技法は、現在でも石の割とりに活用され、亀裂をテコ等によって広げたのであろう。矢穴技法は、和田晴吾『古墳時代の石工とその技術』『北陸の考古学』1983年に詳しい。

## 第3章 比企郡小川町増尾穴八幡古墳

### 第1節 調査の契機

埼玉県比企丘陵のやや西寄りに位置する穴八幡古墳は、数少ない関東地方の終末期古墳の一つとして從来より関心が払われてきた。とくに凝灰岩の切石を使用した胴張りアーチ状の横穴式石室を主要な埋葬主体部の形式とする比企地方のなかにあって、緑泥片岩の板石を組んだ横穴式石室といった非在地性の強い古墳である。

今回この古墳の墳丘部を測量調査するきっかけとなったのは、上記のような特殊な内容をもつこの古墳に、正確な墳丘実測図がなかったことと、小川町教育委員会でもこれからの開発に先駆けて実測図の必要性ができていたためである。幸い小川町教育委員会の高橋好信氏の御好意により、今回町当局主体で、墳丘実測図を描くことができ、今後の研究に多いに寄与していくと思われる。

なお墳丘実測にあたり、清水美代子・村上光英・中山浩彦・川津和久・福本勉の諸氏に調査の補助をしていただいた。また本稿で掲載した横穴式石室の実測図は、昭和45年に芹沢範子・長内順子の両女史が、実測された図に石材の接線などを加筆したものである。なおこの作業にあたり、三木弓彦君に実測の補助をお願いした。

### 第2節 穴八幡古墳への関心

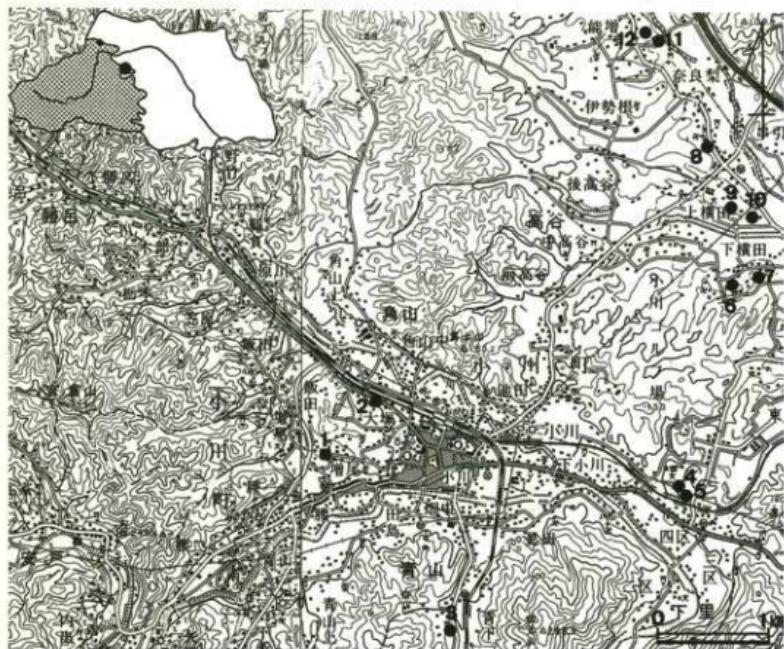
穴八幡古墳への関心は、江戸時代にさかのぼる。「新編武藏風土記稿」卷193（文政11：1829年）によると、寛文（1661～73）年中、この増尾村の代官であった坪井次右衛門の時である。村民が、陸田開発のために穴八幡古墳の周囲を開墾し、横穴式石室を開口させた。ここには「石室の奥行四間許、内法の高さ六尺、幅五尺餘」と横穴式石室の規模や、石材に青石を使用していることが記されている。入り口の左には、建治四（1279）年の年号が刻まれており、鎌倉時代には開口していた可能性が高い。なおこの古墳からは、蔵骨器が出土しているという。また石材が小川町の下里から産出する下里石で、中世には盛んに板石塔婆の原材として搬出されている。

出土遺物として水晶の数珠玉（切子玉）や五輪塔・石棺があったことも記され、被葬者として宗尊親王（註1）や守邦親王（註2）があげられている。

『新編武藏風土記稿』には、さらに「古墳及近傍図」が掲載されている（第22図）。これによると、墳丘には、松と杉が植えてあったことがわかり、また背後の丘陵も、整形を受けていたことがわかる。墳丘の東側は、谷状となっていたらしく水田化されている。背後に見える神社は、現在も壮大な社をもつ八幡神社の境内である。

### 第3節 穴八幡古墳の立地と周辺の歴史的環境

穴八幡古墳（1）の周辺の遺跡分布をとくに古墳時代に限ってみると、この地域は、きわめて古墳の少ない地域であることがわかる。また古墳は単独墳が多く、梅大塚古墳（2）愛宕古墳（3）などにすぎない。小川町の盆地部におそらく古墳時代の集落があるのだろうが、現在は市街地になってしまっており、その事実を確認するのは大変困難である。下里から東の嵐山側へ下れば、平松1・2号墳



第18図 増尾穴八幡古墳周辺遺跡分布図

(4・5)などの古墳群がある。又蟹田川沿いには、稲岡遺跡(6)越弥遺跡(7)中居遺跡(8)峰原遺跡(9)などの集落遺跡があり、新田古墳群(10)行人塚古墳群(11・12)などの墓域とは、隔絶されていたようである。

穴八幡古墳の立地は、東西に長い台地の中央やや奥に位置し、東と西に緩い峰をもち、北は漸く高くなり、南は谷状となり、谷地には小河川が流れる。こうした周辺の環境は、中国の風水思想を取り入れた墓域設定の考え方によくあっており、きわめて終末期古墳の特徴的なポイントを突いているといえる。

#### 第4節 墳丘について

墳丘の中心軸を、ほぼ南北にとった一辺31.4mの方墳である。標高122m前後の旧地表面に立地している。八幡神社の一角のため、保存状況は極めてよかつた。墳頂部には、杉の大木があり、調査に支障をきたしたが、その他はいたって良好な状態であった。墳頂部は、やや北側に崩れてはいるが、平坦面を構成している。7m×7m程度である。墳丘は、二段に構築されており、段は、不明瞭ながら2~3mの幅をもって全周している。

横穴式石室は、墳丘基底部(旧地表面)上に設定されており、その前面には、数基の石塔が置か

れている。これらの施設や前記の開墾によって、この部分は、相当痛め付けられてはいるが、全体の姿を想定していくためには支障はない。また墳丘の西側は、開墾によって大分割られており、東側も町道建設の際に壊されている。

外表施設としては、挙大の礫が多数見られたが、積極的に葺石や貼石・外護列石などを考える材料としては、難しい。無論埴輪はみられない。

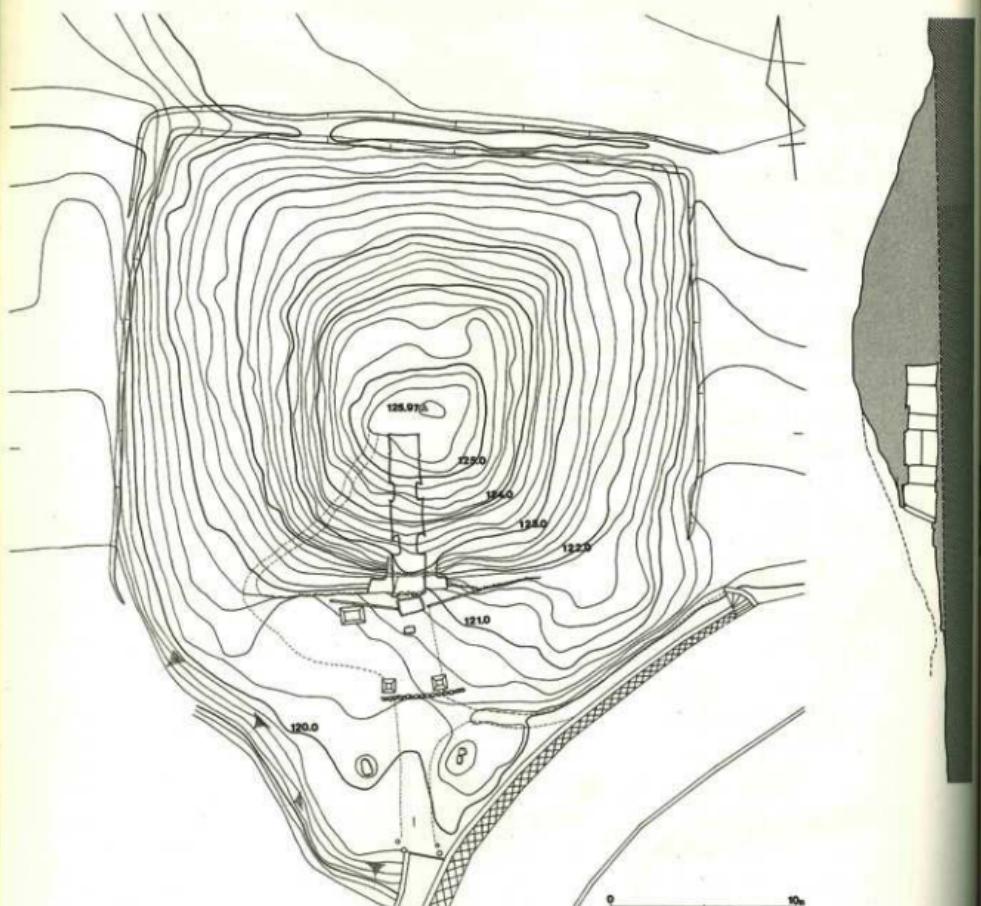
#### 第5節 横穴式石室について

昭和45年に芹沢範子・長内順子の両女史が、南に開口する横穴式石室を、実測調査している(註3)。これによると奥室は、奥壁から玄門の内側まで2.50m、玄門の外側まで3.50m、壁はほぼ垂直で幅は、1.65mである。前室は、玄門の外側から前門の内側まで1.90m、玄門の外側まで2.80mである。幅はほぼ一定で1.66mである。羨道は、長さ1.90m、幅1.90mである。

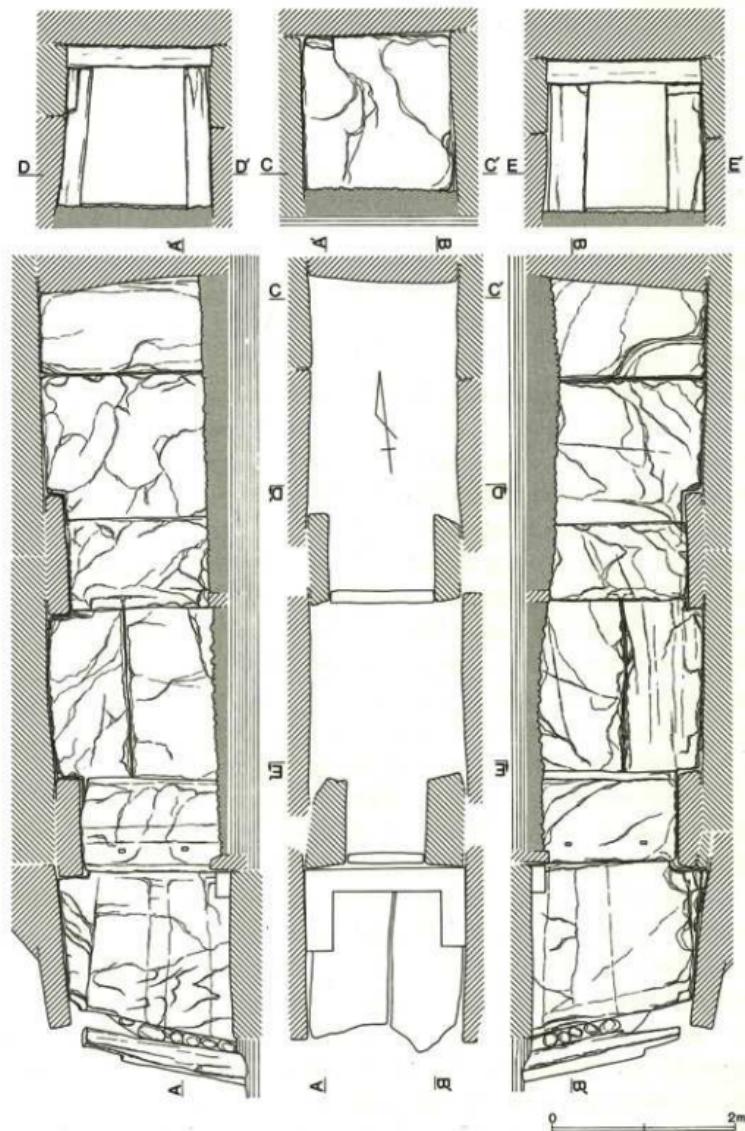
奥壁に1枚、奥室側壁に板石を2枚継ぎきしている。玄門は、鳥居型に組まれ、一枚石を横置きした玄室につながり、玄門と同様な構成の前門につながる。羨道部の石材も一枚石の継ぎきで組まれる。天井石は、各室とも一枚石で構成され、玄門と前門の冠石の2枚をあわせた5枚で構成される。穴八幡古墳の袖石は、庵島古墳群や黒田古墳群の多くの玄門が、側壁の構築とともに板石を挟



第19図 増尾穴八幡古墳周辺地形図



第20図 増尾穴八幅古墳墳丘実測図



第21図 増尾穴八幡古墳横穴式石室実測図

み込んで構築するのに、縦置きしてから冠石を据えることによって安定させる方法を探っている。この工法は、ほかには行田市八幡山古墳にみられるのみである。開口方向は、N-5°-E。

横穴式石室の前の墳丘に、立て掛けたように2枚の一枚石が置かれているが、これは『新編武藏風土記稿』の「古墳及近傍図」には見られず、少なくとも文政11年以前には、存在しなかったことがわかる。恐らく江戸時代後期の穴八幡信仰に関連して置かれたのであろう(第22図)。

横穴式石室の設計プランの復元を行なうために、6世紀末から7世紀にかけて使用された高麗尺と唐尺によって分析する。各部の実測値が、30cmと35cmの近似値で割切れる数値を求めるとき、唐尺で割切ることがわかった。これによると、奥壁幅5尺、高さ6尺、玄室長10尺(4尺+6尺)、玄門厚さ1尺、幅3尺、冠石幅1尺、厚さ4尺、前室幅6尺、長さ6尺、高さ6尺(3尺+3尺)、前門幅1.5尺、厚さ3.5尺、高さ5尺、羨道幅6尺、高さ6尺、長さ(現状)6尺である。

### ま と め

穴八幡古墳の横穴式石室の主要構築材である緑泥片岩は、古墳時代後期の主要石材として重要な位置を占める。横穴式石室のプロポーションは、小型石材の集合面である側壁と、大きな單一面を必要とする部材壁(奥壁・天井・玄門・前門)によって構成され決定される。古墳の造墓が著しく活発に展開されたのは、集落の立地に近い河川の中下流が主な舞台となっていた。谷口集落は別として、最も多量に使う側壁材は、近隣の川原から直接入手するか、露出している岩層から切り出し、入手することによって販売している。しかし奥壁や天井石あるいは補石などは、河川の上流に産出した石材を輸送する以外になく、そこに大型石材の搬送関係をみることができる。

比企地方の横穴式石室の場合、側壁材の構成は、次の4類にわけて考えることができる。

A類 片岩系の石材を横置きし、小口積みして胴張り型石室を構成するタイプで、東松山市西原古墳群・嵐山町稻荷山古墳群などに見られる。

B類 岩殿丘陵産の凝灰岩を使用した横穴式石室で、東松山市桜山古墳群や下唐子古墳群・附川古墳群などに見られる。比較的硬質でやや大振りの部材で構築する。

C類 吉見丘陵産の凝灰岩を使用した古墳で第Ⅲ段階加工(註4)した石材は、胴張り型石室に用いられ、第Ⅱ段階加工した石材は、直線胴型石室に用いられる傾向にある。前者は、東松山市柏崎古墳群や滑川町羽尾古墳群に見られる。後者は、東松山市岩鼻古墳群・屋田古墳群に見られる。

D類 荒川産の人頭大の川原石を小口積みした横穴式石室で、ゆるい胴張りを構成する。川本町鹿島古墳群や、花園町黒田古墳群などに普遍的に見られる。

A類は、都幾川上流、B類は、その下流、C類は、比企丘陵中央から北部、D類は、荒川流域でそれぞれ小地域圏をもって成立している。側壁の構成石材が、この地域圏を超えて流通した痕跡は少なく、側壁用石材の掌握と分与が完結しており、ある規制の存在を裏付けている。

それに対し広域石材である緑泥片岩は、小川町から東秩父あるいは藤岡市にいたる地域から産出する石材で、小地域さらには、国(註5)を超えて供給された。

緑泥片岩の輸送は、ほかの大型石材と同様に、先駆の指摘通り、河川を利用した運輸方法が考えられよう。輸送はさらに構築者(造墓の施主)が、彼の員に多くの肉体的労働を賦課して、この

協同事業を、異小地域間を障害なく通過させうることが、前提となつてはならない。この二つの権利つまり緑泥片岩の流通権の掌握こそ、各小地域を束ねたれた在地首長層の権利である。

穴八幡古墳の被葬者は、緑泥片岩の板石の採取（採掘）権を保持し、各小地域へ分与する立場にあり、各小地域の石材取得権を規制・承認できた。古墳時代後期、群集墳の造墓の波の到来は、過度の石材の需要を将来した。石室構築材として適当な石材も無尽蔵にあるわけでもなく、こうした規制が働く条件となったのであろう。

緑泥片岩をふんだんに使用できた古墳の被葬者こそ、その掌握者として推定できる。すなわち大型の緑泥片岩の板石を輸送し、加工し、組み立てた行田市小見真觀寺古墳・坂戸市白山勝呂神社古墳・土屋神社古墳や、さらに採取地に最も近い小川町穴八幡古墳にみることができる。

白山勝呂神社古墳（註6）は、越辺川の右岸に位置し、近くに胴山古墳がある。径30m程度の円墳ないし方墳で、墳頂部には勝呂神社の社殿があり、その東側に緑泥片岩が額をのぞかせている。また墳丘南側には、本墳で、出土したと伝えられる石材が集積されている。このなかには、溝状の加工や小口部の加工を施したり、あるいは上部に削離をつけたおそらく天井石と考えられる石材もある。小見真觀寺古墳や穴八幡古墳との共通した加工技法を指摘でき、本墳の埋葬主体部の構造を類推することが可能である。

土屋神社古墳は、社殿の奥に大型の緑泥片岩と凝灰岩を使用した巨石巨室墳を構成している。入間地方最大の横穴式石室であろう。

よく酷似した横穴式石室が、茨城県の出島村風返稻荷山古墳（註7）にみられる。風返稻荷山古墳は、同様の板石（黒雲母片岩）を使用した横穴式石室で、三室構造である。くびれ部にも箱式石棺があり、ここからも副葬品が出土している。銅鏡も出土しており、いわゆる推古朝の銅鏡配布説に関連した古墳である。さらによく似た石室が、筑波山の西側の平沢・山口古墳群（註8）では普遍的に見られる。どうやらこの古墳群の近隣（筑波山東麓）に、片岩系石材の構築・加工集団の拠点があったと思われる。

穴八幡古墳の構築スタッフは、これら片岩系石材を利用する加工構築技術者集団の系譜を引いているのであろう。緑泥片岩の掌握者は、彼らを将来させ、とくに非在地性の強い形態の横穴式石室を構築させたのである。

（田中）

### （註）

- 1 鎌倉幕府6代將軍、文久3（1266）年謀反の疑いで帰京している。
- 2 鎌倉幕府9代將軍、幕府滅亡の際出家してまもなく死んだ。
- 3 芹沢範子・長内順子「穴八幡古墳（埼玉県比企郡小川町）の石室」「古地研究」第19号 1971年
- 4 田中広明「終末期古墳の地域性—関東地方の加工石材使用石室の系譜—」『土曜考古』第12号 1987号
- 5 国を超えて運ばれた例として、千葉県木更津市金鈴塚古墳の緑泥片岩がある。ただし壁体構築材ではなく、横穴式石室内の箱式石棺材として使用されている。埼玉古墳群の將軍山古墳群の房州石と関連して述べることができれば、国造級の首長層間に石材を通じた供給関係があったことを指摘できよう。
- 6 金井塙良一「人間地方の前方後円墳—北武藏の前方後円墳の研究（2）—」『埼玉県立歴史資料館研究

紀要』第2号 1980年

7 「出島村史」茨城県出島村 1970年

8 筑波大学『筑波古代地域史の研究』1981年

### 追記

墳丘調査終了後、小川町教育委員会によって、墳丘の西側に住宅建設の開発に伴う事前調査が行なわれることになった（昭和63年度春）。調査の結果は、町当局から正式の調査報告書が刊行される予定なので、詳しくはそれによりたいが、今回の墳丘調査を著しく否定する内容は検出されていない。それどころか、東国の大規模古墳における方墳の在り方を考えていくうえで、重要な事実が数多く確認されている。報告書の刊行が待たれる。

### 古墳及傍近圖



第22図 「新編武藏風土記稿」卷193に描かれた穴八幡古墳

## 第4章 比企郡滑川町羽尾岩屋塚古墳

### 第1節 調査の契機

岩屋塚古墳は、比企郡滑川町大字羽尾4878番地に所在する。現在、古墳は墳丘を完全に削平され、畠地内に横穴式石室を露出している。石室は、ほぼ南に向かって開口する凝灰岩質砂岩の切石を用いて構築された横穴式石室である。この古墳は比企地方の後・終末期古墳の埋葬施設として普遍的な胴張り型横穴式石室を有する古墳としてしばしば紹介されてきたが、これまで石室構造を具体的に検討することができる実測図がなかったため今回調査を実施することにした。ただし現在玄室の内部には天井石が落下し、また、多量の土砂が流入しているため、石室の内部の状況を調査することはできなかった。そのため今回の調査では、やや煩雑になるが、石室を外側から見た状態で実測調査をおこない、石室の構築状況や石材の加工、取扱方等の特徴を把握することを目的とした。

調査は、昭和63年1月30日と31日の2日間に亘って実施し、相田美樹男・小林万希子・田口明子・三橋悦子・吉田喜代子の各氏に調査の協力を頂いた。調査の実施にあたっては滑川町教育委員会木村俊彦氏、並びに土地所有者の赤沼広造氏には御協力、御高配を賜った。記して謝意を表する。

### 第2節 岩屋塚古墳の立地と周辺の歴史的環境

北比企丘陵は、和田吉野川・滑川・市野川などの中小河川によって丘陵内部まで複雑に開析され、多くの小丘陵が形成されている。岩屋塚古墳は滑川と市野川に挟まれた丘陵部に位置し、周辺には小規模な古墳群が数多く分布している。

岩屋塚古墳（1）の前面に東西に入り込む支谷の谷奥部には、昭和26年に東京大学考古学研究室によって発掘調査されたわたご塚（愛宕塚）古墳を含む大谷古墳群（3）がかつて所在していた（註1）。わたご塚古墳は、直径約15m、高さ約2mの小規模な円墳で、埋葬施設は凝灰岩質砂岩の切石を用いて構築された複室構造の横穴式石室である。出土遺物は棘箆被をもつ鑿箭式・片刃箭式の鉄鎌、刀子等の武器類と金環、銅環、丸玉、臼玉等の装身具類を出土している。鉄鎌の形式から7世紀前半の築造と推定される。谷の入口部付近には滑川町教育委員会によって発掘調査された大道古墳（2）が所在する（註2）。調査の結果、大部分が破壊されていたが胴張り型石室の一部が検出され、金環2、丸玉3、鉄鎌1、鉄製鞆尻金具を出土し、7世紀後半頃の築造と推定されている。また、同一丘陵の北西部斜面には、現在2~3基の痕跡を残すのみであるが、かつては13基程の古墳から構成された唐子古墳群（4）が所在していた。やや大型の金壺塚という円墳や、どんどん塚と呼ばれる古墳が存在したというが実態は不明である。

谷を隔てて南に対峙する丘陵部には、中尾古墳群（5）・表古墳群（6）・平古墳群（7）などの小規模な古墳群が分布する。このうち、平古墳群の羽尾古墳が東京大学考古学研究室によって調査されている。羽尾古墳は丘陵の頂上に近い南斜面に立地する直径約20mの円墳である。埋葬施設は、凝灰岩質砂岩の切石による無袖型横穴式石室である。東側壁にのみ緩やかな胴張りが認められ、短冊型・梯型・笏型等の平面プランを呈する一般的な無袖型石室とは、やや異なった平面プランを呈する。出土遺物は直刀4、刀子2、鉄製無窓鐸1を出土している。この他に、当該地区には6世紀後



1. 岩屋塚古墳 2. 大道古墳 3. 大谷古墳群 4. 唐古古墳群  
 5. 中尾古墳群 6. 表古墳群 7. 平古墳群 8. 月輪神社古墳  
 9. 月輪古墳群（屋田遺跡） 10. 花見堂古墳群 11. 寺の台古墳  
 12. 大木古墳群 13. 寺前古墳群 14. 両表古墳群 15. 天神山古墳群  
 16. 壇戸山古墳群 17. 古里古墳群 18. 野原古墳群 19. 円正寺古墳群  
 20. 漢戸山古墳群 21. 三千塚古墳群 22. 鴻の面古墳群  
 23. 比丘尼山横穴墓群 24. 天神山横穴墓群 25. 高根山横穴墓群  
 26. 平谷窯跡 27. 羽尾窯跡 28. 寺谷魔寺

第23図 羽尾岩屋塚古墳周辺遺跡分布図



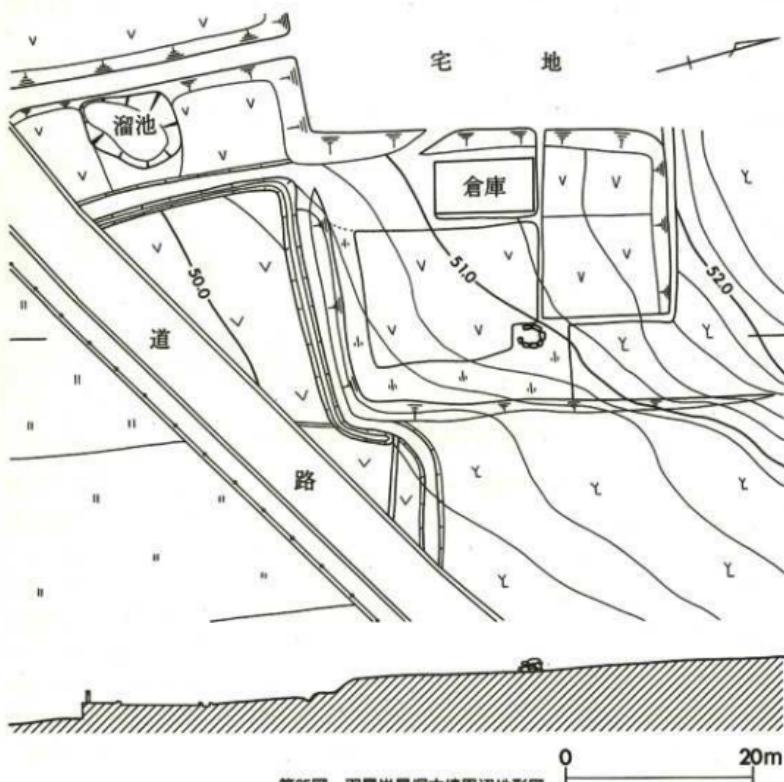
第24図 羽尾岩屋塚古墳関連遺跡分布図

半から7世紀前半に亘って継続的に操業された須恵器窯である羽尾(27)・平谷窯跡(26)が近接して所在する(註3・4)。古墳時代における在地での須恵器生産の特質は、特定の古墳の築造を契機として、古墳への副葬を目的に単次的に生産が行われた段階であったことが、現在までの調査例から判明している。また須恵器窯出現の背景には、須恵器の製作に適した粘土・燃料等の確保、製品の運搬路など地理的な諸条件に大きく左右されたことは想像に難くないが、須恵器工人を他地域から招聘し、生産を管掌することの可能な強力な政治的・経済的勢力を有する支配者層の存在が主たる要因であったことが推察されている。さらに須恵器窯の出現と相前後して当該地区には飛鳥寺系の素弁8葉蓮華文軒丸瓦を出土し、7世紀前半代の創建と推定される寺谷庵寺(28)が存在する(註5)。このように当該地区は古墳時代から律令時代への転換期の様相を胴張り型石室・須恵器生産・寺院造営といった歴史的現象をとおして解明することのできる歴史的に重要な地区である。

### 第3節 墳丘について

前述したように、この古墳は後世の開墾・耕作によって封土を完全に消失しているため、現状からは墳形及び墳丘規模について知ることは難しいが、周辺の地形の検討をおこない墳丘の復元を試みてみたい。

この古墳は、標高67.7mの三角点を最高所とする東西に派生する小丘陵の南に向かって傾斜する緩斜面に立地し、古墳の前面には支谷が東西に入り込み、滑川の形成した沖積地を眺望することができる。付近の標高は約50.5mを測り、現在の水田面との比高差は約6mを測る。現在古墳の周囲は畠地として耕作され平坦となっており、石室の前方は農道の敷設によって一段低く削りとられており。また、東側も同様に石室の近くまで桑畠の開墾によって削りとられており、旧地形が大きく改変されている。一方、石室の背後には、北側に14mほど隔てて、東西方向に直線的に走るカット面が認められる。この部分も桑畠としての開墾による改変の可能性は強いが、終末期古墳の墳丘築

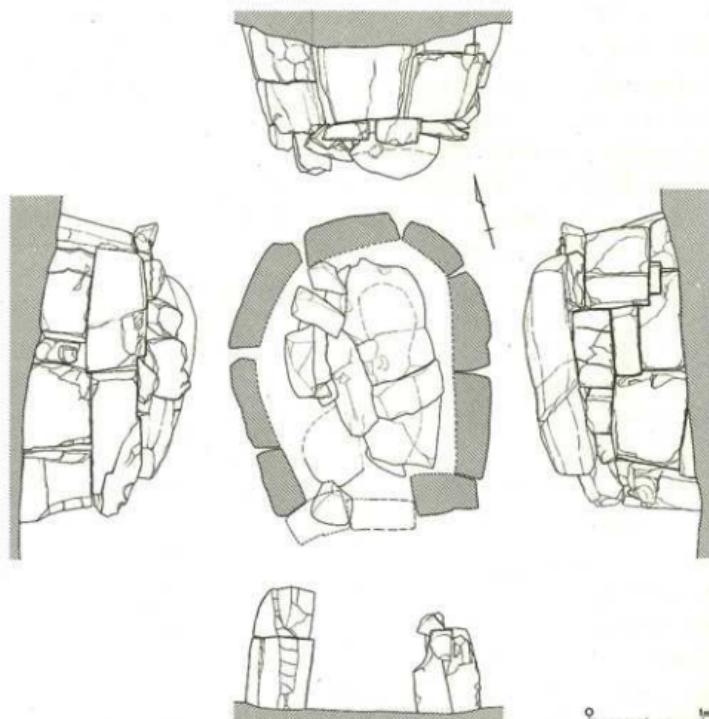


第25図 羽尾岩屋塚古墳周辺地形図

成の特徴である墳丘背後の地山整形の痕跡とも推察される。この点に関しては、今後の周溝確認調査等の発掘調査の結果を待たなければならないが、現況の地形から推して、斜面部を整形して墳丘を築成した可能性が強く、かつ、墳丘規模はそれほど大型の墳丘とは考えられず、また墳形についても円墳あるいは方墳であったものと推察される。石室の構築に関しては、現地表面下に石室基底部が埋没していることから、旧地表面を掘り込んだ「掘り方」の中に構築されたものと推定される。なお、調査時には埴輪・土器片等の散布は認められなかった。

#### 第4節 横穴式石室について

石室は、玄門部より前方を既に失い、玄室のみを残存している。そのため、構築当初の状態、单室構造あるいは複室構造であったのかは不明である。玄室内部には天井石が崩落し、かつ、多量の土砂が流入しているため、正確な石室規模の計測値を得ることはできないが、現状での玄室長は約2.30mを測り、奥壁より0.7m前の位置に最大幅1.75mを有する、入口部に向かって直線的に幅員を減じる小型の胴張りプランを呈する。主軸方位はN-15°-Eである。次に、石室の各壁体の状



第26図 羽尾岩屋塚古墳横穴式石室実測図

況について見てゆくことにする。

奥壁は比較的大型の台形を呈する凝灰岩の切石を僅かに内傾させて据え置き、その上部に小型の長方形を呈する切石2石を横積みして構成されている。奥壁と接する両側壁材の側面は、斜めに欠き取りが施され、奥壁石材と密着させる方法がとられている。また、上部の小型の切石に接する側壁上端隅には、小さなL字状の切組が施され、天井石の荷重を受ける造作を施している。

右側壁は、下半部に比較的大型の方形を呈する切石3石を置き、上半部に長方形を呈する小振りの切石を積み上げ、全体に3~4段積みをしている。L字状の切組は現状で5箇所を確認できる。このうち奥壁寄りの下段の石材には1石に2箇所の切組を施し、階段状に仕上げるものも見られる。左側壁は、右側壁に比べ大振りの石材によって構成されている。下半部に方形を呈する切石3石を置き、上半部には長方形を呈する切石2石を横積みして、互目積となっている。天井石に接する部分の造作は、天井石の崩壊に伴い明確ではないが、上端部に3箇所の切組が認められることから、小型の石材を互目積にして、天井石の加重の平均化を図っていたものと思われる。

玄室入口部には、玄門施設として、側壁面より内側に約35cm突出させて置かれた門柱石が右側のみ遺存している。門柱石は、現状で幅58cm、厚さ35cm、高さ72cmほどの直方体を呈し、奥壁側に僅かに内傾して置かれている。また、羨道あるいは前室側壁に接する部分には2cmほどの段差をもつ削り込みが施されている。左側の門柱石を欠損しているが、同じ状況とすれば玄門の幅は約76cmと推定される。なお、玄門部のボーリング探査の結果、74×26cmほどの枠石の存在が確認されている。

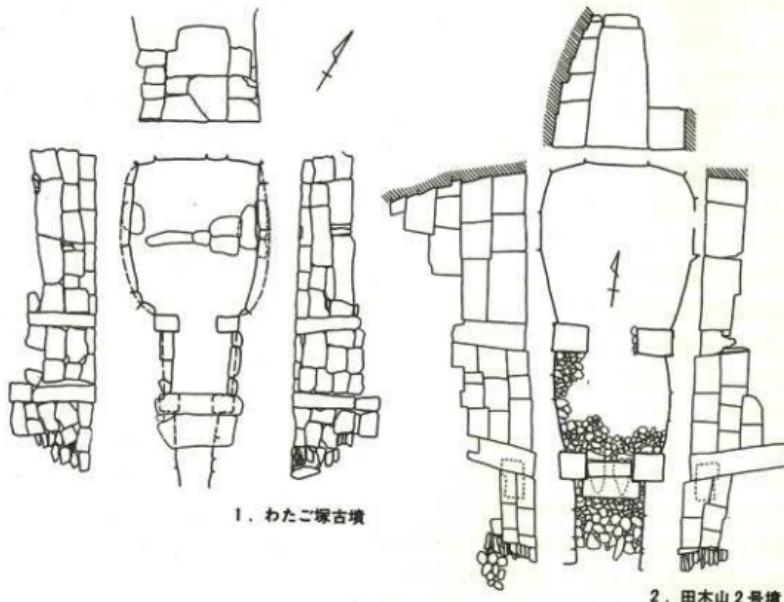
天井石は先述したように崩壊し、内部に斜めにずり落ちてしまっている。壁体と同じ凝灰岩の一枚石からなり、最大厚約60cmを測る大型のものである。内面は平滑に仕上げられているが、上面は亀甲状に丸みをもつて整形され、端部は斜めに面取り加工が施されている。また、粗削り段階の手斧状工具を用いた痕跡が良く残っている。

なお、当古墳は、かなり以前に開口したため、出土遺物等の記録は残されていない。

### ま　と　め

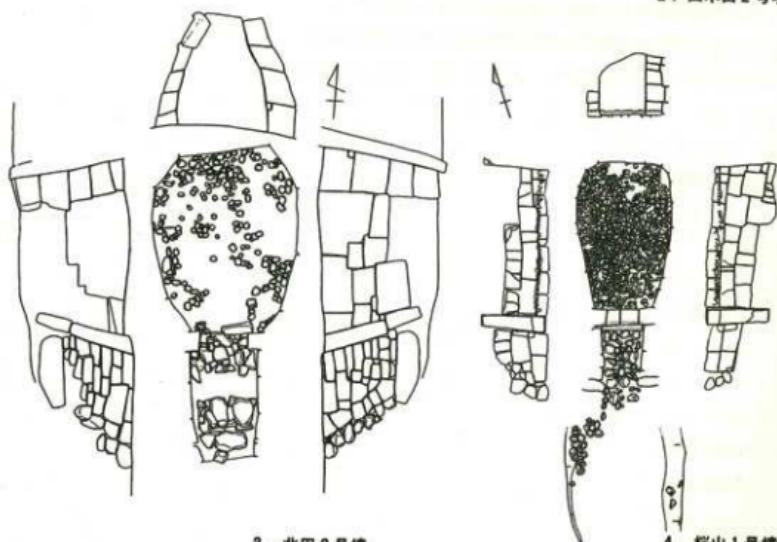
今回の調査の結果、岩屋塚古墳は緩斜面に立地する小型の凝灰岩質砂岩切石積の胴張り型横穴式石室であることが判明した。石室の現状は崩壊が著しく、調査はかなり制約を受けたが、石室構造に関して多くの知見を得ることができた。以下、その構造的特徴についてまとめてみたい。

玄室の平面プランは、玄室最大幅を奥壁寄りに有し、特に奥壁際の曲線が大きいため、奥壁と側壁との区分が不明瞭であることが特徴である。同様な平面プランをもつ例としては、東松山市田木山2号墳・桜山1号墳、嵐山町北田2号墳(註6)などが確認されている(第27図)。このうち田木山2号墳のみが複室構造を呈し、その他の例は、短小な羨道部を備える単室構造のもので、岩屋塚古墳は後者に類似する。次に、玄室の平面プランと密接に関連する奥壁の構成について見てみることにする。奥壁は、比較的大型の台形の切石を中心には据え置き、その上部に小型の切石2石を側壁にかかるように横積みをしている。このような壁体構成をとる奥壁について、周辺の石室との比較を行い、石室構造の変遷過程の中での位置付けを明確にしたい。まず、比企地方における胴張り型石室の出現期のものである東松山市若宮八幡古墳・青塚古墳、吉見町かぶと塚古墳について検討して



1. わたご塚古墳

2. 田木山2号墳



3. 北田2号墳

4. 桜山1号墳

第27図 関連横穴式石室実測図

0 2m

みたい。若宮八幡古墳の奥壁は、大規模な埋葬空間を確保するために大型の部材を用いて4段積みしている。1段目は2石、2・3段目は大型の切石1石、4段目は天井石を水平に架構するために小型の切石3石によって構成されている。全体としては側壁の持ち送りに合わせて上部に行くに従い幅員を階段状に狭めている。特に、2段目の石材は両側にL字状の切組を施し、凸字形に加工している。青塚古墳は、大型の石材を3石3段横積みにして構成されている。このうち最上部の石材の両端は、側壁の持ち送りに合わせて斜めに欠き取りが施されている。かぶと塚古墳は、天井石と接する部分は崩壊していて不明であるが、2箇所にL字状の切組を有する大型の石材によって構成されている。このように、大規模な横穴式石室であるため、大型の部材を横積みにして玄室部の幅員と高さを確保している。これらの古墳に後続する時期の東松山市附川1・7号墳においても奥壁は、長方形の石材を3段横積みにして構成されている。特に、附川7号墳は、若宮八幡古墳の奥壁に見られた凸字形の石材加工の系譜をうけ、凸字形の石材を積み上げた階段状の奥壁に発達している。しかし、次の段階になると石室規模の縮小化に伴い、奥壁を台形の大型石材を1石ないし2石2段縱積みにするものに変遷してゆくと推定される。つまり、玄室最大幅を中央にもち、玄室長の長い長胴張り型の田木山1号墳・桜山7号墳にみられる2段縱積と玄室最大幅を奥壁寄りにもち、奥壁に大型の石材を置き、その両側に小型の石材を積み上げて構成する、奥壁と側壁の区分の不正確な田木山2号墳・桜山1号墳等に区分される。この他に、東松山市柏崎4・5・6号墳のように小振りの石材を積み上げて奥壁を構成する例も認められる。恐らく、胴張り型石室導入以前の片袖型・無袖型石室の系譜をひくものとも推定される。従って、岩屋塚古墳は小規模な横穴式石室を有し、奥壁構成及び奥壁と側壁の区分の不明確な平面プランを呈するなどの特徴から、比企地方の胴張り型石室の中では後出する段階に属するものとして大過ないものと思われる。

岩屋塚古墳の年代的位置付けであるが、出土遺物が不明であるため石室の構造的特徴から検討をおこないたい。東松山周辺の横穴式石室の編年については既に金井塚良一氏によっておこなわれ、大きくI～V形式に分類されている(註7)。このうち胴張り型石室はIII～V形式に該当する。III形式は若宮八幡古墳・青塚古墳などの胴張り型石室の初現期に位置付けられるものである。巨石を使用した複室構造のもので、6世紀末から7世紀初頭に比定されている。IV形式は附川1・7号墳に代表される「比企型」の胴張り型石室の典型例である三味線胴張りの複室構造のもので、7世紀前半に位置付けられている。V形式は三千塚古墳群第4支群2・4号墳などの石室規模の縮小化した単室構造のもので、7世紀後半の年代に比定されている。岩屋塚古墳の石室は玄室部分のみの遺存であるため、複室か、単室かは明確でないが、前述したように平面プラン及び奥壁構成の検討から、桜山1号墳・北田2号墳などの単室構造のものに類似し、金井塚氏の分類のV形式に該当する。築造年代については、桜山1号墳から頸部の沈線を消失した、口縁部に段を有する無沈・有段式のフラスコ形提瓶が出土し、7世紀第II～III四半期に位置付けられている(註8)ことから、岩屋塚古墳もほぼ同時期の築造と推定される。

最後に、寺谷庵寺との関連について考えてみたい。寺谷庵寺は、出土した素弁8葉蓮華文軒丸瓦(第28図)の検討から7世紀第II四半期に位置付けられ、畿内との密接な関係のある有力氏族によって建立された氏寺的な性格を有する寺院と推定されている。また、羽尾・平谷窯跡による須恵器生

産から寺谷廃寺の造営は、時間の断絶なく  
営まれていることから同一系譜の氏族によ  
る一連の歴史的現象として捉えられている。  
その氏族の性格について、羽尾窓跡の  
生産開始時期と胴張り型石室の出現が同時  
期であることから渡米系氏族との関連につ  
いても指摘されている(註9)。

岩屋塚古墳は石室構造の検討から7世紀  
中葉頃の築造年代が想定され、寺谷廃寺の  
創建年代に時期的に近接し、距離的にも北  
東に約600mしか離れていないことから両  
者に密接な関係が想定される。しかし、岩屋塚古墳は谷奥部に位置する7世紀前半頃の築造と推定  
される、わたご塚古墳に後続して営まれた小規模な古墳と考えられ、その内容からも、寺院を造営し得るような有力な氏族の墳墓に比定することは難し。ここでは、寺谷廃寺を造営した氏族に關係  
のある人物を想定しておきたい。現状では両者の関連性について明確にすることは困難であり、今後は周辺地域の後・終末期古墳の様相をふまえたうえで、その歴史的位置付けを検討してゆきたい  
と思う。

(大谷)

#### 《註》

- 1 東京大学考古学研究室「埼玉県宮前村の古墳調査」『考古学雑誌』第49巻第4号 1964年
- 2 高柳 茂・木村俊彦『寺前古墳群・大道古墳』滑川町教育委員会 1986年
- 3 高柳 茂・高橋一夫『羽尾窓跡発掘調査報告』滑川町教育委員会 1980年
- 4 藤原高志「平谷窓跡」「埼玉県古代寺院跡調査報告書」埼玉県県史編さん室 1982年
- 5 藤原高志・宮 昌之「滑川村寺谷廃寺」「埼玉県古代寺院跡調査報告書」埼玉県県史編さん室 1982年
- 6 植木 弘「古里古墳群」嵐山町遺跡調査会 1987年
- 7 金井塚良一「古代東国史の研究」 1980年
- 8 池上 悟「古墳出土の須恵器について—フ拉斯コ形提瓶—」  
『立正大学人文科学研究所研究紀要』 第23号 1986年
- 9 坂野和信「北武藏における古代瓦の変遷」  
高橋一夫「古代寺院成立の背景と性格」「埼玉県古代寺院跡調査報告書」埼玉県県史編さん室 1982年  
シンポジウム「北武藏の古代寺院と瓦」「埼玉考古」第23号 1984年

## 第5章 入間郡毛呂山町大類1号墳

### 第1節 調査の契機

苦林古墳群は、越辺川中流域右岸の坂戸市塚原から毛呂山町大類・王林寺にかけて分布する入間地方の中では最大規模の古墳群の一つである。苦林地区の沖積地を望む河岸段丘部の縁辺に沿って前方後円墳5基、円墳47基の計52基の古墳が現在確認されている。既に破壊され消滅したものや未確認のものを含めると、その数は100基前後になるものと推定される。現在の行政区画では坂戸市と毛呂山町にまたがって分布しているため、坂戸市域に所在する前方後円墳3基と円墳10基を塚原古墳群(註1)、毛呂山町域の前方後円墳2基と円墳37基を大類古墳群(註2)と便宜的に二分されている。しかし両者は越辺川と高麗川に挟まれた毛呂山台地の北縁部、標高40~41mほどの台地平坦部に立地しており、地形的に両者を区分することは困難である。また台地縁辺部に沿って南北約600mの範囲に帯状に分布することや群構成の内容からも本来一体となって展開した古墳群として捉えられるもので、今井 堅・橋口尚武両氏によって提唱されたように現在の行政区を越えて古墳群を総称する場合には苦林古墳群と呼称し、その歴史的性格を解明することが有効と考えられる(註3)。

苦林古墳群は、全長25~45mの前方後円墳5基が狭い範囲に近接して分布し、前方後円墳の集中する古墳群として早くから注目され、越辺川流域の古墳文化を解明するうえで重要な位置を占めるものと認識されてきた。ところが、今まで本格的な発掘調査が行われておらず個々の古墳の内容について不明な点が多かった。しかし、坂戸市・毛呂山町両教育委員会の精力的な分布調査によって古墳群の内容が次第に明らかにされてきている。また、塚原古墳群に所在する前方後円墳については、市史編纂事業の一環として墳丘の測量調査が実施されている。そこで、今回の調査では、毛呂山町所在の大類1号墳(旧毛呂山1号墳)について墳丘測量調査を実施し、その墳丘形態について具体的に確認することを目的とした。調査は、昭和63年3月11日から3月13日の3日間に亘って実施し、犬木 努・大熊茂宏・戸沢健二・渡辺咲子の各氏に調査の協力を頂いた。なお、調査の実施にあたって、毛呂山町教育委員会 村木 功氏には御協力、御高配を賜った。記して謝意を表する。

### 第2節 苦林古墳群をめぐる従来の研究

苦林古墳群の位置する苦林地区は「苦林野古戦場」と呼ばれ、南北朝時代の貞治2年(1363年)に鎌倉公方足利基氏と下野の豪族芳賀伊賀守高貞等の軍勢が戦った古戦場として知られている。江戸時代に編纂された『新編武藏風土記稿』によれば長塚を中心に無数の古墳が所在し、この地は塚原と呼ばれていたという。また、『太平記』にみられる芳賀伊賀守が苦林野に着き、小塚の上に打上がるという記事にでてくる小塚とは、長塚のことではないかとしている。長塚の上には村民によって戦死者の菩提をともらうために供養碑が建てられていると記していることから、今回調査をおこなった大類1号墳がこれに該当するものと考えられる。周辺にある多くの塚については、その戦いの時に戦死した武者の屍を埋めたものと考えられ、街道沿いに数多くの古墳が分布する往時の情景が「苦林野図」として描かれている。(第29図)

昭和26年に刊行された『埼玉県史』第1巻には、前方後円墳の瓢箪塚・長塚を中心に35基ほどの

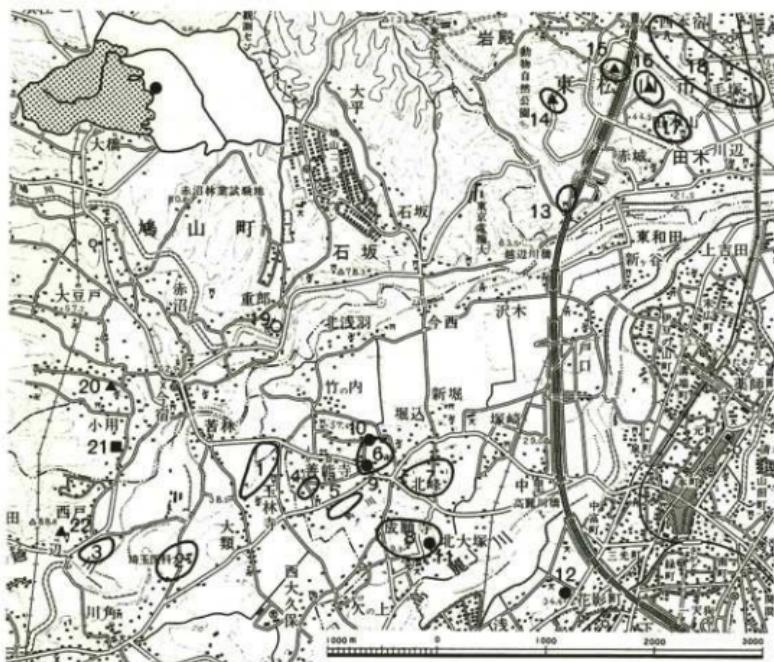
# 苦林野圖



第29図 「新編武藏風土記稿」巻172に描かれた苦林古墳群

小円墳が散在していたと記されている。そして、瓢箪塚は秩父青石と凝灰岩からなる「石榔」を埋葬主体部とし、直刀1振、馬具、鎧の一部、銀環3個、須恵器壺2個を出土したという記載がみられる。このことから瓢箪塚と呼ばれた前方後円墳は、横穴式石室を内蔵する古墳であったと推定されるが、この古墳が現存するものどれにあたるのか、あるいは消滅してしまったのかさえ、現状でははっきりしていない。また、玉林寺所在の一古墳からは、五鈴銅、内行花文鏡1面、鉄鐸1個、金環・銀環多数、紡錘車2個、管玉・勾玉・琥珀玉・瑠璃玉・滑石玉等が出土したというが、現在遺物は散逸してしまっている。

苦林古墳群に関して最初に考古学的な検討がおこなわれたのは、金井塚良一氏による「入間地方の前方後円墳—北武藏の前方後円墳の研究（2）—」である（註4）。金井塚氏は、比企地方の前方後円墳に統いて入間地方に分布する前方後円墳の様相について、越辺川・高麗川・小畔川・新河岸川等の各流域ごとの前方後円墳の形成過程を明らかにし、相互の関連性について分析を行っている。特に、湮滅してしまって現存しない古墳についても詳細に検討をおこない復元を試みている。その中で苦林古墳群に関しては、昭和34年に実施された悉皆分布調査の古墳調査カード、古記録、伝承や現地踏査に基づき現存する5基以外にも数基の前方後円墳が存在した可能性を指摘している。また、前方後円墳の築造時期は6世紀代を中心に形成され、一部7世紀にかかるものと推定し、入間地方における最後の前方後円墳が含まれている可能性があるとしている。そして出現の背景には、越辺川下流域の坂戸台地に築かれた雷電塚古墳・嗣山古墳などの大型前方後円墳の築造と軌を一に



第30図 苦林古墳群周辺遺跡分布図

して形成されたものであるという重要な指摘がなされている。

昭和62年には毛呂山町教育委員会によって大類38・39号墳が発掘調査されている。2基とも開墾により墳丘は削平され、周溝の一部が調査されたものである。このように既に消滅してしまった古墳がかなり存在することが予想される。最近では、村木功氏によって分布調査の結果をもとに古墳群の分布状況及び群構成の様相についてまとめられている(註5)。さらに、周辺の古墳時代の集落跡の調査が活発におこなわれ、古墳を営んだ創出基盤の実態が解明されつつある。

### 第3節 苦林古墳群の立地と周辺の歴史的環境

越辺川中流域の毛呂山台地には、苦林古墳群(1)をはじめとする多数の古墳群が分布している。この地区は、越辺川下流域の坂戸台地に分布する入間地方最大の前方後円墳である胴山古墳を主墳とする勝呂・新町古墳群と並んで古墳の密集する地区として知られる。苦林古墳群の南西に位置する川角古墳群(2)は、現在38基の円墳の所在が確認されている。また、その対岸には14基の円墳からなる西戸古墳群(3)が所在する。これらの古墳群は一連の古墳群として展開しており、前方後円墳が継続的に営まれた苦林古墳群を中心に南へ墓域を拡散していく様相を窺うことができる。

また、越辺川の支流の葛川流域には、善能寺(4)・大河原(5)・三福寺(6)・北峰(7)・成願寺(8)等の各古墳群(註6)が所在し、「入西古墳群」と総称されている。このうち三福寺古墳群の入西石塚古墳(旧板戸105号墳 9)は、昭和31年頃宅地造成のために消滅してしまったが、その際に小形仿製鏡2面(珠文鏡・乳文鏡)、挂甲を含む甲冑一式、鉄鉢1、鉄槍または剣2、直刀1、鉄鎌30数本を出土したことが知られている。最近、地籍図等の検討から全長36~40mほどの前方後円墳であった可能性が指摘されている。また出土遺物及び周溝部分から出土した円筒埴輪の再検討から6世紀初頭頃の築造年代が想定されている(註7)。付近には昭和61年に当事業団が発掘調査をおこなった塚の越遺跡において古墳跡1基(10)が確認されている。この古墳跡は周溝の一部分のみの調査のために、その全容は明らかでないが、小型の前方後円墳の前方部と推定され、周溝部分からは人物埴輪などの形象埴輪のほか円筒埴輪が出土している。これらの前方後円墳の存在から葛川流域にも一つの首長墓系譜が成立していたものと推定される。

高麗川の形成した沖積地を望む石上神社古墳(11)は、「埼玉県史」には前方後円墳であったと記載されているが、現在は直径約50m、高さ約10mほどの円墳状を呈し、前方後円墳の痕跡は全く失われている。内部主体、出土遺物は不明で、築造時期は明らかでない。「埼玉県史」によるとさらに周辺には大字峯の大日堂と大字新堀に前方後円墳が所在していたと記載されているが湮滅してしまい、その実態については不明である。

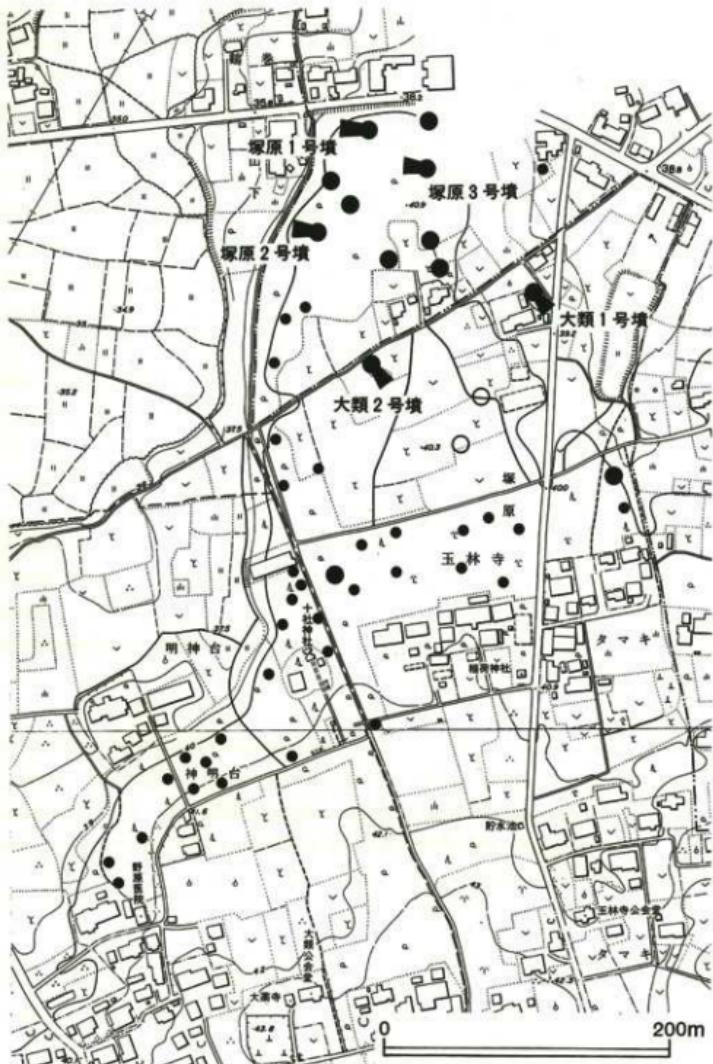
また石上神社古墳の対岸、高麗川右岸の浅羽には直径約50m、高さ約4.5mの大型円墳、土屋神社古墳(12)が所在する。南に開口する横穴式石室を埋葬施設とし、砂岩の切石を用いて構築された胴張り型石室で、天井石には緑泥片岩の巨石が架構されている。この石室は江戸時代に既に開口していたようで、その内部には石像が安置されている。石室構造から7世紀前半代の築造と推定され、前方後円墳消滅後の有力首長墓として位置付けられる。

越辺川と高麗川の合流点付近の北方、岩殿丘陵には駒堀(13)・根平(14)・舞台(15)・桜山(16)・田木山(17)等の各遺跡において7世紀代の小規模な古墳群が形成されている。埋葬施設はほとんどが横穴式石室をもつもので、胴張り型石室を主体とするが石室構築材など多様な在り方を示している。このうち桜山・根平・舞台の3箇所で古墳時代の須恵器窯が確認され、奈良・平安時代に大規模な窯業地帯を形成する南北企窯跡群の周辺部に位置している。さらに入西地区の対岸の丘陵部には十郎横穴墓群(19)が所在する。

#### 第4節 苦林古墳群の概要

苦林古墳群の概要については、既に分布調査の成果をもとに村木氏によって古墳群の分布範囲、群構成について検討がおこなわれている。ここでは、それを参考に前方後円墳を中心に概観してゆくこととする(第31図)。

前方後円墳5基は、分布域の北側に偏在し、越辺川の形成した沖積低地を眺望することのできる場所に選地している。東西約190m、南北約180mの狭い範囲に5基が近接して築造され、南側に群集する円墳群とは明確に分布域が分かれている。このような沖積低地を意識した立地の在り方は、古墳群を営んだ集団の生活・経済基盤と無関係ではないと思われる。最近の調査成果から、周辺に



第31図 苦林古墳群分布図(加藤 1987・村木 1988より作図)

は6世紀前半以降継続的に大規模な集落が形成され、越辺川から取水する東西に走る用水路網を基軸とした水田経営による低地部の開発が本格化していたことが明らかにされつつある。恐らく、この時期に「入西条里」と呼ばれる条里水田の源初的なものが形成されていた可能性が強い。

5基の前方後円墳を細かくみると分布状況、墳丘規模の大小、及び主軸方位の差異から、塚原古墳群（坂戸市域）の3基と大類古墳群（毛呂山町域）の2基に区分することができる。塚原古墳群の3基は、東西方向に主軸を有し、前方部を西に向かって、近接して築造されている。一方、大類古墳群の2基は、南北方向に主軸をとり、前方部を南に向けるもので、約120mの間隔を有して隣接している。墳丘規模は塚原古墳群のほうが相対的に大型であり、優勢である。次に、各古墳の内容について見てゆくことにする。

#### ①塚原1号墳（旧坂戸130号墳）

塚原1号墳は、塚原古墳群の北端部に位置し、東西に主軸をもつ前方後円墳である。現存する墳丘規模は、全長約40m、高さは後円部約3.8m、前方部約3.6mを測り、前方部の発達した墳丘形態のものである。墳丘は後世の破壊により大きく変形され旧状を留どめていない。特に後円部の東側と南側が削平されている。主体部は不明であるが、墳丘表面に円礫が散在していることから葺石施設を有するものと考えられる。過去に埴輪が出土したというが、今回の踏査では確認できなかった。

#### ②塚原2号墳（旧坂戸133号墳）

塚原2号墳は、塚原1号墳の南約100mに位置し、同じく主軸方位を東西にとる全長約45m、後円部高約5m、前方部高約4mを測る。古墳群中最大規模の前方後円墳である。遺存状態も良好で、墳丘の周囲には周溝の痕跡が良く残っている。主体部は未調査のため明確ではないが、横穴式石室を有するものと推定される。墳丘には人頭大の葺石が認められる。本墳の採集遺物に須恵器高環脚部と甕胴部破片があるので、その一部を図示しておく。（第32図）

採集した須恵器は、くびれ部南側の盗掘坑の断面から採集したものである。高環脚部1は、長方形の透孔をもつ長脚高環の破片で復元径12.8cmを測る。形態は、ラッパ状に外反して開き、脚端部を上方に僅かにつまみ上げ、面取りしたシャープな作りのものである。透孔は小片のため2方透しになるのか、3方透しになるのか明確でない。透孔の下端に2条の沈線を巡らす。胎土は微砂粒を僅かに含むが良撰され、焼成も良好・堅緻である。色調は暗灰褐色を基調とし、断面はセピア色を呈する。須恵器甕胴部破片2は、外面に平行叩き目、内面に同心円文の当て具痕を残す。胎土は径1~3mmの大砂粒を多く含み、焼成は良好である。色調は灰褐色を呈する。



第32図 塚原2号墳（旧坂戸133号墳）表探遺物

### ③塚原3号墳（旧坂戸128号墳）

塚原3号墳は、塚原1号墳の南東約50mほどに位置する全長約32mの小型の前方後円墳である。後円部と前方部の高さが約2.5mとほぼ同じで、前方部の長さのやや短い墳形を呈する。遺存状態は比較的良好。主体部は未調査のため不明である。

### ④大類1号墳（旧毛呂山1号墳）

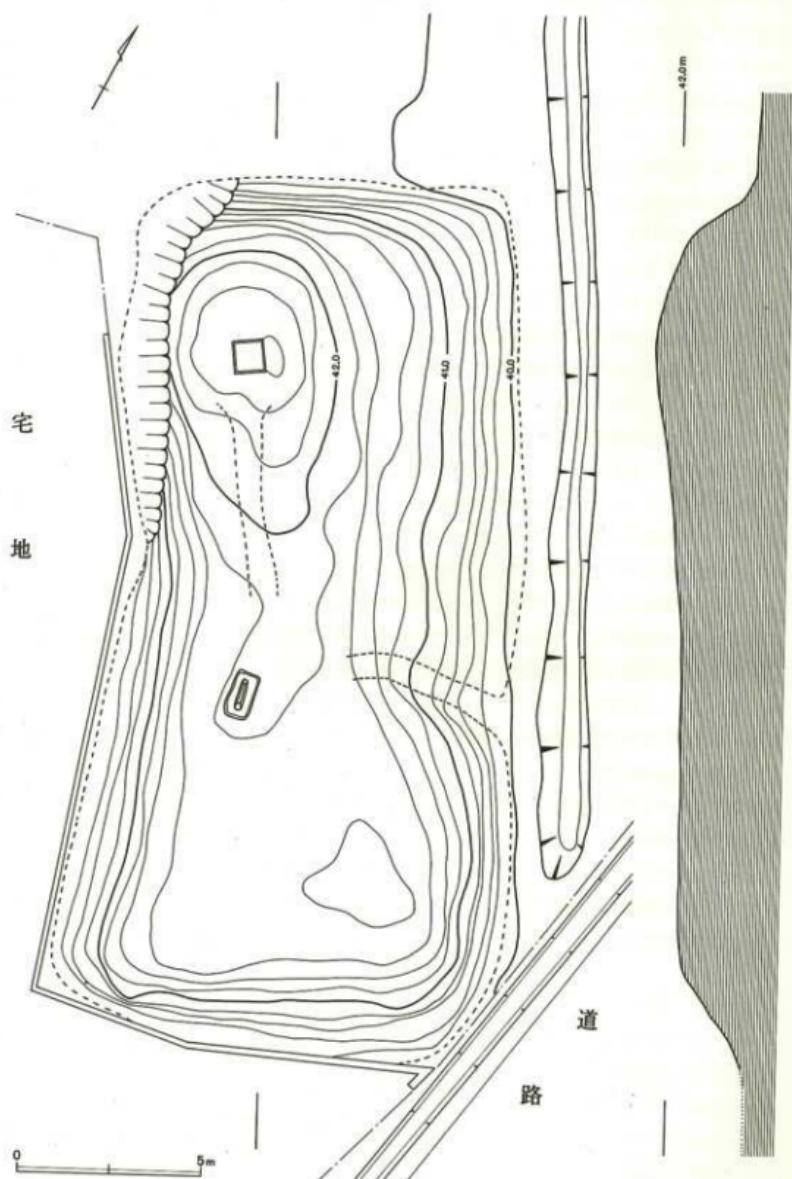
大類1号墳は、南北方向に主軸をとり、前方部を南に向ける前方後円墳である。今回の調査で現存長24.2mの小型の前方後円墳であることが判明した。しかし、周囲がかなり削平されており、かつては全長32mほどであったと記録されている。墳丘形態の詳細については後述する。

### ⑤大類2号墳（旧毛呂山4号墳）

大類2号墳は、大類1号墳の西約120mほどに位置し、後世の開墾によって墳丘の大部分が削平され、旧状を殆ど留めていない。南北方向に主軸をとる前方後円墳であるが、現状からは前方部と後円部の区分は不明瞭である。残存する墳丘部分は、現存長約25m、現存最大幅約6mを測り、大類1号墳と同規模の古墳と推定される。出土遺物は、墳丘及び周囲の畠地から円筒埴輪・須恵器が採集されている。

これらの前方後円墳の築造時期については、正式な発掘調査がおこなわれていないため明確にし得ないが、墳丘形態の特徴から基本的には後期の前方後円墳と考えられる。6世紀代に5基の前方後円墳が相次いで築造されたものと想定される。このうち塚原2号墳の墳丘から採集された須恵器高环は陶邑編年のT K 43～T K 209型式（註8）に該当する形態的特徴を示すことから6世紀後半の年代が推定され、その築造時期に近い時期を示すものと考えられる。大類2号墳採集の円筒埴輪は外面調整は1次調整の継刷毛調整のみで、円形の透孔を有する、突堤は突出度の弱いもので、川西編年のV期の新しい段階（註9）に該当する特徴を示し、6世紀後半に位置付けられる。残りの3基の前方後円墳については、築造時期を示すような出土遺物が知られていないため個々の年代については不明である。このように、僅かな資料しかないため各古墳の築造時期を確定し、変遷過程を明らかにすることは現状では困難であるが、5基の前方後円墳が6世紀代に一世一代的に一系列の造墓集團によって累代的に築造された結果と考えるよりも、その分布状況、墳形の大小、主軸方位の差異などからむしろ二系統の造墓集團によって構成された墓域である可能性が大きい。また、この二つの造墓集團の間には墳丘規模の大小から從属関係が反映されているようである。このような在り方から越辺川中流域を支配した首長層の重層的な支配機構の一端を具現しているものと推察される。

円墳について村木氏は、その規模によって（1）直径が20m以上のもの、（2）15～20m未満のもの、（3）10～15m未満のもの、（4）10mに満たないものの4つに区分して、群構成を検討している。その結果、直径が20m以上の円墳は分布にばらつきが認められ、これに隣接して小規模な円墳が群集する傾向が認められる。また前方後円墳と円墳という形態的規制の他に、円墳間における規模上の社会的規制が存在した可能性を指摘している。これは群形成の過程において大型の円墳を中心に小型の円墳が從属する形でいくつかの小支群を構成しているものと推定される。これらの円墳の築造時期は、盗掘によって河原石積みの横穴式石室の一部を露出するものが認められ、6～7



第34図 大類1号填埋丘実測図

世紀に亘って形成されたものと推定される。

### 第5節 大類1号墳の調査概要

大類1号墳は、墳丘主軸をN-28°-Wにとる、前方部を南東方向に向ける小型の前方後円墳である。現在、後円部の中央には文化11年に建てられた供養塔が、前方部には「苦林野古戦場遺跡」の碑が建立されている。墳丘の遺存状態は、墳丘裾部が開墾及び宅地造成等によって削り取られ、大きく変形している。このため、現状での墳丘基底部の平面形は長台形状を呈し、くびれ部の位置を明確に判断することは困難である。古墳の周囲は、北側が畠地として耕作され、東側は墳丘裾部に小道が走り、それに沿って根切り溝が掘削されている。また、南側と西側は民家と接しブロック塀に囲まれ、前方部南東隅は南北に走る町道によって切断されている。

後円部は、西半部を大きく破壊され、墳丘断面を露出している。北半分は開墾によって削り取られ急斜面となっており、旧状をほとんど留めていない。これに対して東半分は比較的旧状を留めている。この部分を観察すると標高41.4~41.6mのコンターラインに緩やかな傾斜面が認められることから、二段築成であった可能性も考えられる。

前方部は、コンターラインが直線的に延び、残りの良いように見えるが、実際は墳裾ぎりぎりまでコンクリート塀がせまり、改変を受けているのは明らかである。また、墳頂部は小公園として利用され平坦となっており、削平した際に排出された土砂が、東半分に流出した状況を測量図から読み取ることができる。

墳丘の平面規模については、墳丘裾部が削平され、大きく改変を受けているため、築造当初の規模を知ることはできないが、現状での計測値は次の通りである。

全長24.2m、後円部径南北10.7m、東西11.0m、前方部長13.5m、幅11.8mを測る小型の前方後円墳である。現在の墳丘基底線は、標高40.0mのコンターラインを巡っており、現状の墳丘基底よりの高さは後円部では2.6m、前方部では1.8mを測り、後円部と前方部の比高差は0.8mである。先に記したように前方部墳頂が削平されている点を勘案すれば、築造当初は後円部と前方部の高さのはば等しい所謂「二ッ山」形式の前方後円墳であった可能性が強い。

なお、埋葬施設、出土遺物については伝承も残されておらず、不明である。また、外部施設については、過去に埴輪片が採集されたというが、今回の調査では確認されなかった。葺石については、墳丘上に挙大の円礫の露出が部分的にみられるところから存在した可能性がある。

### ま と め

東国において6世紀は、各地に前方後円墳が出現し、最も盛行する時期である。またそれが小地区単位に中小規模の前方後円墳の築造として顕在化する時期である。特に6世紀後半に前方後円墳の築造はピークに達し、7世紀の初め頃には各地で一齊に前方後円墳の築造が停止され、それ以後有力古墳は大型の方墳・円墳に統一され、大きな歴史的転換期を迎える。このような歴史的動向の中で苦林古墳群の形成が開始されたのであろう。しかし、このように前方後円墳が狭い範囲に集中する在り方は、県内においては埼玉古墳群以外にあまり例がなく特異である。埼玉古墳群の場合

は、8基の前方後円墳と大型円墳である丸墓山古墳が南北1km、東西500mの狭い範囲に分布している。墳丘規模が100mを越える稻荷山古墳・二子山古墳・鉄砲山古墳・將軍山古墳、50~80m級の愛宕山古墳・瓦塚古墳・奥の山古墳・中の山古墳によって構成されている。一方、大規模な発掘調査が行われ、古墳群の実態の判明している児玉地方では各古墳群の前方後円墳の数は、さほど多くなく2~3基が普通である(註10)。その中で、前方後円墳の多いものとしては児玉町長沖古墳群、美里町広木大町古墳群があげられるにすぎない。長沖古墳群は小山川に沿って南北0.5km、東西1.5kmにわたって細長く分布し、150基前後の古墳が確認されている。このうち前方後円墳は6基確認されている。全長37mの長沖十兵衛塚古墳、35m以上の長沖31・32号墳、発掘調査によって前方部の発達した墳丘形態であることが判明した全長40mの長沖25号墳と全長26.3mの帆立貝式前方後円墳の長沖8号墳の5基と消滅してしまった内容は不明であるが長沖110号墳が前方後円墳であったとされている。広木大町古墳群では4基の前方後円墳が確認されている。大町両子塚古墳(28m)、大町8号墳(38.5m)、大町9号墳(43m)、広木大町40号墳(43m)で、前方部の小さい、所謂帆立貝式前方後円墳を中心としている。また、比企地方においても前方後円墳はひとつの古墳群に集中せず、各古墳群の主墳として1~2基が点在しているにすぎない。その中で、北比企丘陵に立地する三千塚古墳群には4基の前方後円墳が所在する。三千塚古墳群は、山陵頂上に築造された帆立貝式前方後円墳の雷電塚古墳を主墳として放射状に張り出した尾根ごとに8支群、250基以上の古墳で形成された、比企地方最大の古墳群である。雷電塚古墳は全長86mの帆立貝式前方後円墳で5世紀初頭頃の築造と推定されている。雷電塚古墳の築造以後、空白期間をおいて支群ごとに弁天塚古墳(40m)、秋葉塚古墳(44.5m)、長塚古墳(37m)の3基の後期前方後円墳が築造されている。このように埼玉古墳群を除くと、いずれも支群ごとに築造された結果としての累積であり、苦林古墳群の在り方とは異なり、その特異性がきわだっている。

苦林古墳群出現の背景には、金井塚氏が指摘したように越辺川下流域の坂戸台地に立地する雷電塚古墳(52m)、牛塚山古墳(約70m)、胴山古墳(63m)の3基の前方後円墳の築造が密接に関連しているものと想定される。これら坂戸台地に所在する3基の大型前方後円墳は1箇所に集中することなく点在した在り方を示し、苦林古墳群の存在形態ときわめて対照的である。その墳丘規模からして、これらの前方後円墳は越辺川流域全体を支配した有力首長の墳墓と推定される。恐らく、苦林古墳群をはじめ、葛川、小畔川流域に営まれた小規模な前方後円墳を含む古墳群は、それに従属する形で、政治的地域集団を構成していたものと推察される。今後、より広い視野に立った上で、苦林古墳群の歴史的性格について解明してゆくことが大きな課題である。

末文ではありますが坂戸市史編纂室伊藤研志、同教員委員会加藤恭朗、並びに毛呂山町教育委員会村木功の各氏には苦林古墳群の現状について御教示いただいた、記して謝意を表する。

(大谷)

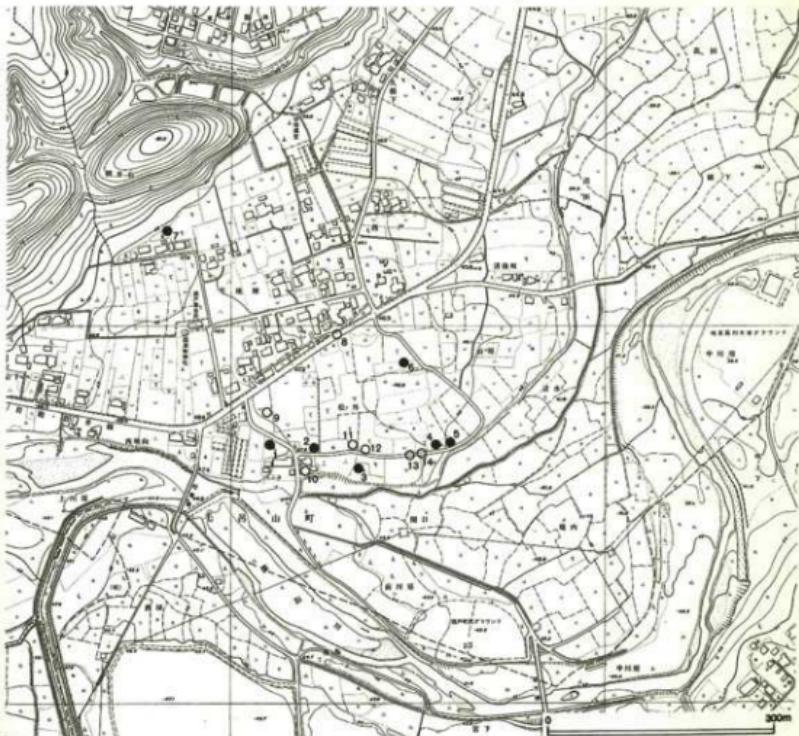
〈註〉

- 1 加藤恭朗ほか『古代の坂戸－坂戸市遺跡発掘調査概報』－』坂戸市教育委員会 1987年
- 2 村木 功『毛呂山町の遺跡－遺跡詳細分布調査報告書－』毛呂山町教育委員会 1988年
- 3 今井 奎・橋口尚武「西戸古墳群について」  
『松の外遺跡・西戸古墳群』毛呂山町教育委員会 1987年
- 4 金井塙良一「入間地方の前方後円墳－北武藏の前方後円墳の研究（2）－」  
『埼玉県立歴史資料館研究紀要』第2号 1980年
- 5 註2と同じ
- 6 加藤恭朗ほか「大河原遺跡・「北峰西浦遺跡」『坂戸市遺跡群発掘調査報告書』第1集 1988年
- 7 今井 奎・橋口尚武「坂戸市入西石塚とその出土遺物の研究」『坂戸風土記』第14号 1988年
- 8 田辺昭三『陶邑古窯址群』I 1966年、『須恵器大成』 1981年
- 9 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻 第2号 1978年
- 10 田口一郎ほか「児玉群及び周辺地域における前方後円墳の研究」  
『いぶき』8・9合併号 本庄高校考古学部 1975年

## 第6章 入間郡毛呂山町西戸古墳群

### 第1節 西戸古墳群の立地と周辺の歴史的環境

西戸古墳群(第30図3)は毛呂山町の北東部、越辺川の左岸段丘部に立地する。越辺川は、古墳群の周辺で大きく蛇行し、広い氾濫原を形成している。古墳群は河岸段丘上の平坦地を中心に分布し、沖積低地との比高差は約4mで、対岸には川角古墳群(2)が分布している。古墳群をのせる段丘部の北側背後には、越生町・鳩山町方面から延びる南北企丘陵がひかえている。この丘陵部には、瓦窯跡と推定される西戸丸山遺跡(22)が所在する。出土した複弁8葉蓮華文軒丸瓦は8世紀第Ⅱ四半期に位置付けられ、遺跡から北東に約1km離れた鳩山町の小用廃寺(21)と浦和市の大久保領家廃寺に供給されたことが確認されている。小用廃寺は坂戸市の勝呂廃寺と同様の棒状子葉をもつ単弁12葉蓮華文軒丸瓦を出土しており、勝呂廃寺と密接な関係にあったと推定されている。また、近くには櫛描き波状文を多用する小形短頸壺を出土した7世紀前半代の須恵器窯、小用窯跡(20)が所在し、



第35図 西戸古墳群分布図(村木 1988より作図)

古墳時代にすでに須恵器生産が開始されていたことが明らかにされている。さらに周辺の丘陵部には奈良時代から平安時代にかけて形成された南比企窓跡群が存在する。

## 第2節 西戸古墳群の概要

現在、墳丘が消滅した古墳あるいは発掘調査された古墳を含め14基の古墳の所在が確認されている(註1)。朝日山の南麓に単独で位置する7号墳を除くと、すべて越辺川の沖積地に面する平坦地に分布している。群中には前方後円墳は認められず、直径15m前後の円墳である1号墳が最大で、他は直径10m前後の小規模な円墳から構成された古墳群である。このうち昭和37年に県道岩殿・岩井線の拡張工事に伴い8号墳(旧毛呂山109号墳)が発掘調査されている(註2)。埋葬主体部は、安山岩を割石積みした胴張り型横穴式石室で、奥壁にも胴張りのみられるものである。盗掘を受けていたため出土遺物はなかったが、かつて多数の鉄鏃が出土したと言われている。また昭和60年には毛呂山町教育委員会によって集落農道整備事業に伴い5基の古墳が調査されている(註3)。部分的な調査であったため主体部のわかるものは少ないが、13号墳は直径11.4mの円墳で、自然石を用いた胴張りの弱い横穴式石室を有している。13号墳に近接する14号墳は小型の石棺状石室が確認されている。また、墳丘裾部が調査された2号墳からは葺石の一部が検出されている。この古墳は地元では「行任塚」と呼ばれ、その墳頂部には明治26年建立の「西戸古塚記」があり、主体部の発掘の様子が記されている。碑文によれば横穴式石室が発見され、石室の内部から数体分の遺骸と刀・鉄鏃・金環などが出土したことがわかる。この他に地元には、開墾等の際に偶然発見された古墳関係の遺物が残されている。9号墳は、現在墳丘を消滅しており、墳形及び墳丘規模については不明であるが、土地所有者である柴崎清孝氏が開墾の際に、石室と考えられる遺構から出土した刀装具、刀子、鉄鏃等の遺物を大切に保管されている。柴崎氏の御厚意により、遺物の観察及び実測調査を快く承諾いただき、今回その概要について紹介することとなった。

## 第3節 西戸9号墳出土遺物について

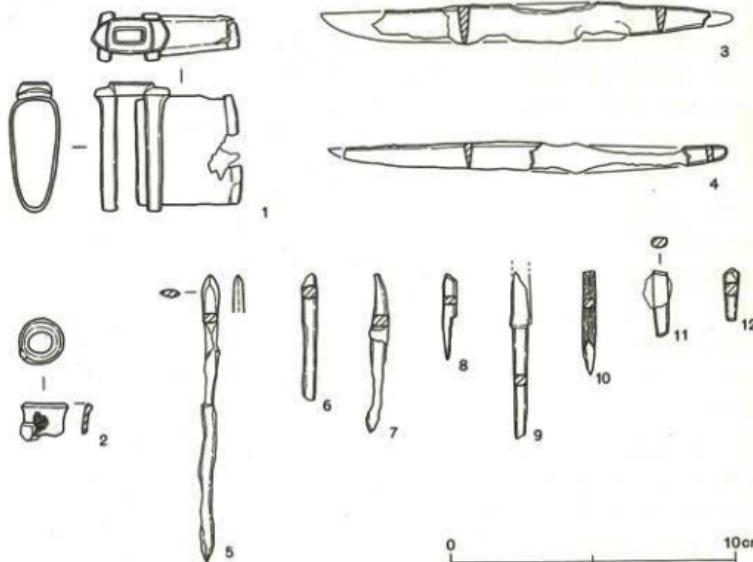
1. 刀装具 (1)は銅製の鞘口金具と双脚足金具である。鞘口金具は長さ3.7cmを測り、腐食のため鞘元側を一部欠失している。断面形は長径3.9cm、短径1.4cmを測る棟側のやや平らな倒卵形を呈している。鞘元には浅い一条の沈線が刻まれている。双脚足金具は、鞘口金具と同じく銅製で、枠形槽の枠金が双脚よりも先と元の両側に長く張り出し、段を有する形式のものである。足金具の総高は4.5cmを測る。槽金は長さ2.7cm、高さ0.5cm、幅1.2cmを測り、先側に丸く張り出し、元側には五角形に近い形で張り出す。帯軌引通し孔は長さ1.0cm、幅0.4cmを測る。足金具の腹帶は長径4.1cm、短径1.8cmを測り、棟側の平らな倒卵形を呈する幅0.5cmほどの環である。腹帶は、槽金の張り出しに合わせて棟側の幅を広げ槽金に鋲付けされている。(2)は把頭の懸通孔に挿入される鉄製の筒形金具(鶴目)で、外径1.5cm、内径0.9cm、長さ1.0cmを測る。上端部はわずかに外反して玉縁状に肥厚する。外表面には一部木質が付着する。

2. 刀子 (3)は切先と茎尻を欠失している。現存長12.0cmを測り、全長およそ14.5cmの刀子であったと推定される。刃幅1.4cm、棟幅0.4cmを測り、棟は平たい。茎は茎尻に向かって徐々に幅を狭め

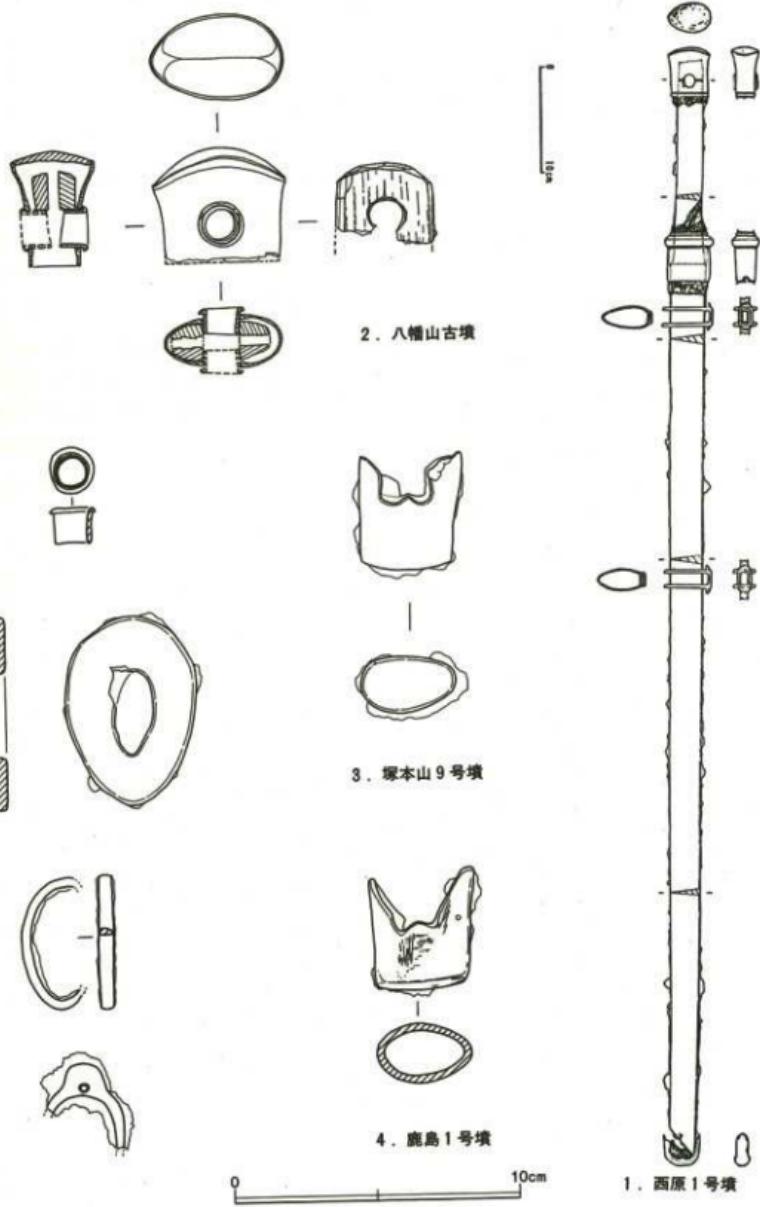
る。断面形は三角形を呈し、棟側で幅0.3cmを測る。間は棟側に浅い間が認められるが、刃側を欠失しているため明確でない。おそらく浅い両間になるものと思われる。(4)は切先を欠失し、銹化のため間から茎にかけて表面が剥離している。現存長13.6cm、刃幅0.9cm、棟幅0.3cmを測る細身の刀子である。切先は膨らみが少なく直線的である。遺存状態が悪く間は明確でないが、おそらく棟側の片開と推定される。茎は先細りで先端部で幅0.5cm、棟幅0.2cmを測り、茎尻は丸みを帯びる。

3. 鉄鎌　すべて破片で、鎌身部の形状のわかるのは5の一点だけである。(5)は鎌身部分が非常に小さく、その先端部にのみ刃を有する端刃整筋式である。現存長10.2cm、鎌身部の長さ1.0cm、幅0.6cm、範被部は0.5×0.3cmの断面矩形を呈する。(6～8)は範被部分の破片で、断面形は0.5×0.4cmの矩形を呈する。(9)は範被から茎にかけての破片で、銹化のため棘状突起を欠失する。(10～12)は茎部分の破片で、断面形は円形ないし矩形を呈する。(10)は外表面に木質が付着し、径0.4cmの断面円形を呈する。

今回紹介した西戸9号墳の出土遺物のうち注目されるのは、かつて神林淳雄氏によって「双脚足物」と呼ばれた横佩き大刀の佩用金具が確認されたことである(註4)。この遺物は西戸古墳群の性格を考えるうえで重要である。双脚足金具は棟側が台状をなす双脚の足金具で、二足佩用の佩用金具として方頭大刀や唐手刀に多くみられるものである。双脚足金具の編年については穴沢晃光・馬目順一氏によって棒形槽の枠金に段があり、棒形の幅が双脚より張り出るものから、正倉院大刀にみられるような枠金の張り出しのない、四角錐台状のものに型式変化すると推定されている(註5)。県内では、東松山市西原1号墳出土の方頭大刀(第37図1)が確認されているにすぎない。



第36図 西戸9号墳出土遺物



第37図 間違刀装具

西原1号墳は、都幾川左岸の菅谷台地東端部に位置する、葺石施設をもつ方墳である。緑泥片岩の割石と河原石を用いて構築された胴張り型横穴式石室を埋葬施設とする。その形態は、付近に所在する嵐山町稻荷塚古墳の石室とはほぼ同形態のものもある。伴出遺物には飛燕式に分類される鉄鑓と銅鏡を出土している(註6)。

方頭大刀は全長103.6cmを測り、銅製の分銅形に近い柄頭をもつものである。茎が柄頭まで及び、茎の目釘孔が柄頭の懸通孔に一致し、銅製の鷲目金具によって固定されている。刀身は角株平造で、師切先である。闇は両側で、銅製の嵌出鍔と鞘口金具を装着している。鞘口金具は長さ3.5cm、幅4.2cmを測り、棟側の先側にU字状の切り込みをもつ。双脚足金具は一ノ足、二ノ足とも遺存する。西戸9号墳例と同じく、枠形槽の枠金が双脚より長く、先と元の両側に丸く張り出して、段をつくるものである。鞘尻金具は銅製で鉄先形につくられているが丸尻となっている。

ここで西戸9号墳例との比較から少し詳しく双脚足金具について見てみることにする。西原1号墳例は総高4.8cmを測り、枠金の長さは2.7cm、高さ0.6cm、幅1.4cmを測る。帯執引通し孔は長さ1.2cm、幅0.7cmを測り、西戸9号墳例とほぼ同じ大きさである。しかし、細部の形状とつくりが異なっている。西戸9号墳例では、段をもち、両側に張り出した枠金に、棟側の幅を広げた腹帶を鉤付けしているのに対して、西原1号墳例は四角錐台状の枠金に棟側が丸く張り出す腹帶を鉤付けすることによって枠金に段を形成している。また腹帶についても西戸例では板状の幅広の環であるのに、西原例は断面円形の幅の狭い環となっており、差異が認められる。穴沢・馬目両氏は西原1号墳例を7世紀第Ⅲ四半期に位置付けている。双脚足金具のみの比較で不十分ではあるが、西戸9号墳例もほぼ同時期のものと推定される。この年代は共伴した鉄鑓の年代とも矛盾しない(註7)。

次に、鉄製鷲目金具について検討してみたい。この鷲目金具は柄頭から遊離して出土したため、どのような柄頭に装着されていたかは明らかでない。先に検討した双脚足金具の多くが方頭大刀の佩用金具として用いられていることから、方頭柄頭の懸通孔に装着されていた可能性も考えられる。しかし、西原古墳例や行田市八幡山古墳出土の銅製方頭柄頭(第37図2)には、銅製の鷲目金具が装着されており、双脚足金具をもつ銅装大刀の他に別口の大刀が副葬されていた可能性も考慮しなければならない。県内では美里村塚本山9号墳(第37図3)から鉄製鷲目金具の類例が出土している。塚本山9号墳では全長91.0cmを測る平棟平造、師切先の直刀に伴って筒形の鷲目金具1個が出土している。この大刀は鉄製の鞘口金具と鍔が装着され、鉄製無窓鍔をもつものである。鷲目金具は直径1.2cm、高さ約1.2cmの筒形を呈するもので、柄頭から遊離した状態で出土している。鞘尻にはハート形の切り込みをもつ断面倒卵形の鉄製鞘尻金具が装着されている。この鞘尻金具は報告書では柄頭とされているが、川本町鹿島1号墳(第37図4)、静岡県大坂上古墳などから出土した類例より鞘尻金具と判断した。このうち大坂上古墳例は方頭大刀に伴うもので、単脚足金具を佩用金具として用いており方頭大刀の中では古く位置付けられている。

西戸9号墳は、埋葬施設の構造及び遺物の出土状態の様相など不明な点が多く明確でないが、現存する遺物の検討から双脚足金具をもつ方頭大刀が副葬されていた蓋然性が極めて強いことを指摘した。また、鉄製鷲目金具については方頭大刀に伴うものか、あるいは木芯柄頭などのようなくらいに大刀に伴うものかは現状では明確にし得ず、検討の余地が残されている。いずれにせよ、西

戸9号墳は双脚足金具や鉄鏃の検討から7世紀の後半に築造されたものと推定される。

最近の装饰付大刀の研究の進展により7世紀の前半に盛行した双龍環頭大刀・頭椎大刀・圭頭大刀などに代わって、7世紀の中頃を境に方頭大刀を中心とする刀制に統一されてゆくことが明らかにされている(註8)。これは前代までの装饰付大刀のはたした役割、畿内政権による地方支配の性格が大きく変化したことが指摘されている。その背景には、律令制移行期における冠位制等の導入による新しい身分秩序の成立に起因するものと推察されている。また、近隣に位置する小用廃寺は勝呂廃寺と同範囲にある棒状子葉をもつ単弁12葉蓮華文軒丸瓦の出土から7世紀末頃には建立されていたと推定されている(註9)ことを勘案すれば、西戸9号墳の被葬者は後に小用廃寺を造営し得る有力氏族の存在を示唆するものであり、7世紀に成長してきた律令官的な性格をもった人物とも推定される。

### ま　と　め

西戸古墳群は対岸に分布する苦林・川角古墳群と密接な関連を有して越辺川中流域に展開した古墳群である。胴張り型横穴式石室を内蔵する古墳が多く、7世紀代を中心に形成された古墳群と推定される。古墳群の開始時期を示す良好な資料に恵まれていないが、昭和60年の調査の際に、2号墳の南側墳裾に近接する位置で確認された6号土壙から6世紀前半に位置付けられる土師器壺3、高杯1、壺1、甕1が出土している。この土壙は直接的に2号墳に伴うものとは考えられないが、遺物の出土状態から「墳外祭礼遺構」と推定されており、古墳群の開始時期を推定する手がかりを与えてくれる。また、13号墳の西側から結晶片岩の板石で構築された箱式石棺が確認されている。石棺の内部から人骨1体分が出土したが、他に出土遺物がなく所産時期は不明であるが、箱式石棺や土壙墓などの無墳丘墓が、古墳とともに古墳群を形成する状況が推定され、6~7世紀代の社会構造を復元するうえで重要な資料を提供している。

今回、資料紹介をおこなった9号墳に関して双脚足金具の存在から方頭大刀が副葬されていた可能性を指摘することができた。県内において方頭大刀を出土した古墳は、東国で唯一の塗漆木棺片をはじめとする銅鏡、銀製弓弭金物片、鉄釘、鉄鏃等の優れた遺物を出土した巨大な横穴式石室をもつ大型円墳の八幡山古墳や銅鏡を出土した西原1号墳などの有力な終末期古墳に限られている。従って、9号墳についても同様に越辺川流域における有力な終末期古墳の一つとして位置付けられ、小用廃寺の創出基盤としての有力氏族の存在を物語ると言えよう。

文末ではありますが西原1号墳及び塚本山古墳群出土遺物の実見にあたり嵐山歴史資料館 栗原文蔵、岩本克昌、今井 宏の各氏には多くの御配慮をいただいた。厚く御礼申し上げます。

(大谷)

### 《註》

- 1 村木 功『毛呂山町の遺跡—遺跡詳細分布調査報告書—』毛呂山町教育委員会 1988年
- 2 田中一郎「毛呂山町の古墳」「毛呂山町史」毛呂山町史編さん室 1978年
- 3 村木 功『松の外遺跡・西戸古墳群』毛呂山町教育委員会 1987年

- 4 神林淳雄「『雙脚』足金物に就いて」『考古学雑誌』第26巻第7号 1936年
  - 5 穴沢暉光・馬目順一「郡山市牛庭出土の銀作大刀」『福島考古』第20号 1979年
  - 6 金井塙良一・渡辺久生『東松山市上唐子西原古墳群発掘調査報告書』 1976年
  - 7 小久保 徹ほか「埼玉県における古墳出土遺物の研究Ⅰ—鉄鎌について—」『研究紀要』1983  
埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1984年
  - 8 濱瀬芳之「円頭・圭頭・方頭大刀について」『日本古代文化研究』創刊号 1984年
  - 9 酒井清治「窯・郡寺・郡家—勝呂廃寺の歴史的背景の検討—」『埼玉の考古学』1987年
- 畠間孝志・宮 昌之・木戸春夫・赤熊浩一「北武藏における古瓦の基礎的研究Ⅱ」『研究紀要』第4号  
埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1988年

## 第7章 茨城県猿島郡境町金岡八龍神古墳

### 第1節 調査の契機

八龍神古墳は、茨城県南西部の利根川流域、猿島郡境町大字金岡に所在する硬質砂岩の切石を切組積みして構築した横穴式石室を埋葬主体部とする円墳である。かつて、金銅装の單鳳環頭大刀の優品を出土したことでも広く学界に知られている。また横穴式石室についても、穹窿状の天井構造をもつ胴張り型石室で、切組積みの手法が駆使された特徴的な石室として古くから注目されてきた。この石室を構成する幾つかの要素は、北武藏、特に比企地方の胴張り型石室に大きな影響を与えたことが考えられ、この種の石室の系譜関係及び伝播ルートなどの問題を解明する重要な鍵を握っているものと思われる。そこで、今後の研究の基礎資料として活用することを目的に横穴式石室の実測調査を実施することにした。調査は、昭和63年2月20日と21日の両日に行い、佐藤見・西原崇浩両君の参加協力を得た。調査の実施にあたって境町教育委員会の方々には御協力、御高配を賜った。記して謝意を表する。

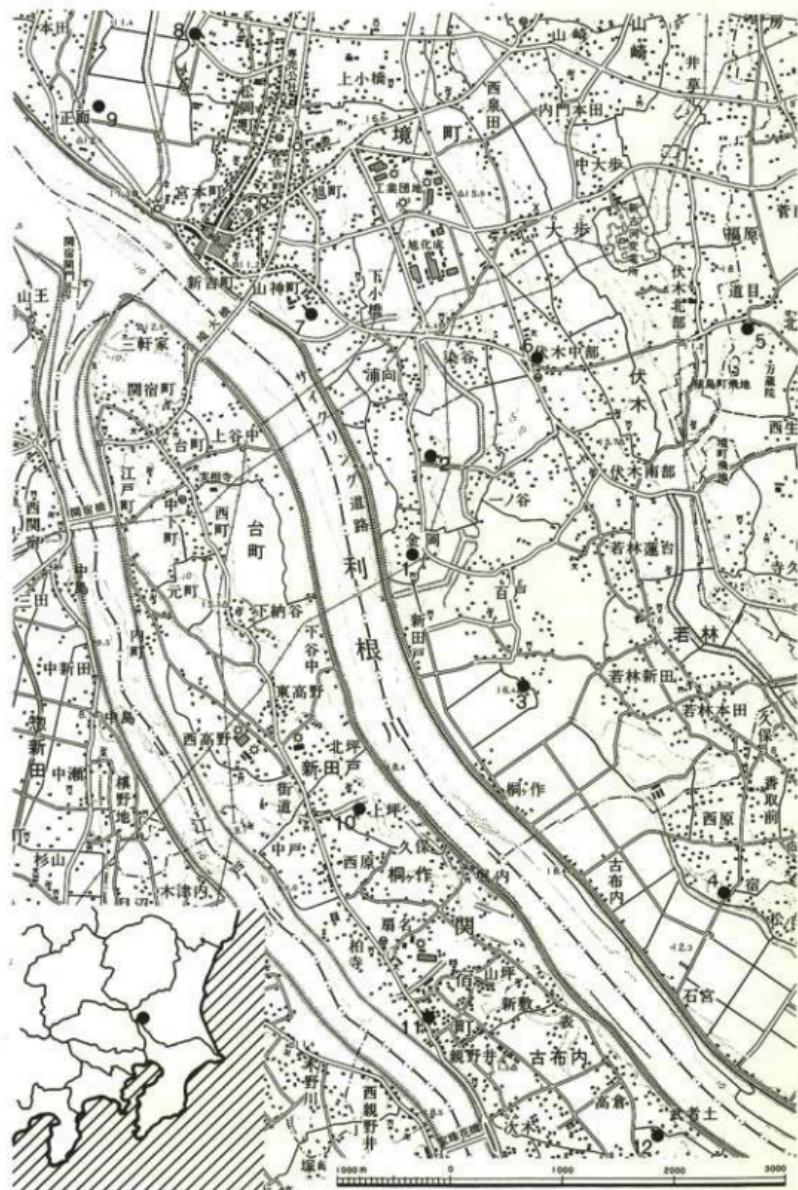
### 第2節 八龍神古墳をめぐる從来の研究

八龍神古墳は、明治42年4月に古墳の名称の由来となった墳丘上の八龍神を祀る社殿を他に移転し、開墾を行った際に、偶然石室が開口したものである。玄室内部から金銅装單鳳環頭大刀、金環、銅、及び人骨が発見された。これらの出土遺物は東京帝室博物館に寄贈され、和田千吉氏によって、その内容が『考古学界』誌上に紹介されている(註1)。さらに同年9月には前室(あるいは後道部)から金銅製飾板、鉄鎌、杏葉・雲珠・辻金具・轡・鞍等の馬具類が出土し、再び和田氏によって報告されている(註2)。のちに、この古墳から出土した單鳳環頭柄頭は、高橋健自氏によって『鏡と劍と王』(明治44年)の中で、その代表例として紹介され、広く学界に知られるようになった。さらに大正11年には小松真一氏によって「下総国に於ける或三四の石室古墳」(註3)と題して千葉県成田市上福田古墳・茨城県猿島郡境町八龍神古墳・浦向沼台下古墳・猿島郡五霞村穴薬師古墳の4基の石室の報告がなされている。小松氏は、石材加工などの比較検討を行い、その築造時期や穹窿状石室の系譜について言及し、日本における穹窿状石室の出現は、朝鮮半島における石室古墳の間接的な影響化によるものと推測している。

このように八龍神古墳は学史的に重要な古墳であるにもかかわらず、それ以後の研究においては、あまり問題とされることがなかった。これは今までに石室の正確な実測図がなく、周辺地域の切石積み石室との比較研究を行うことが困難であったことに起因するものと思われる。

### 第3節 八龍神古墳の立地と周辺の歴史的環境

八龍神古墳の所在する境町は利根川の東岸、江戸川との分岐点付近に位置し、両河川を境に千葉・埼玉県に隣接している。古代の国都制では下総国猿島郡に属する。周辺の地形は、利根川の流域に広がる沖積地と利根川に注ぐ宮戸川、江川、東・西仁連川、飯沼川等の中小河川によって樹枝状に開析された台地部が発達している。この台地部は猿島台地と呼ばれ、利根川と飯沼川に挟まれた北



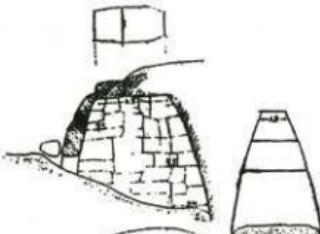
第38圖 全國八龍挖古墳圓刃遺跡分布圖

西から南東へ延びる標高20m前後の平坦な台地で、常緑台地の一部を構成している。現在、利根川は関東平野を貫流し、太平洋へ注いでいるが、古くは古利根川や庄内古川等を幹線として東京湾に流れ込み、たびたび氾濫を繰り返していた。現在の流路は江戸時代における瀬替えによるものである。この大規模な河川改修により流域に形成された低湿な沖積地や多くの湖沼は近世以降に干拓が行われ、現在は水田として耕作され大穀倉地帯に変貌している。八龍神古墳は境町の中心部から南に約3.4km離れた利根川の沖積地を望む標高12.5m前後の南北に延びるなだらかな台地の南端部に立地している。この台地の東方にはかつて「一ノ谷沼」と呼ばれた開拓谷が南北に細長く入り込んでいたが、現在は干拓され水田に姿をかえている。

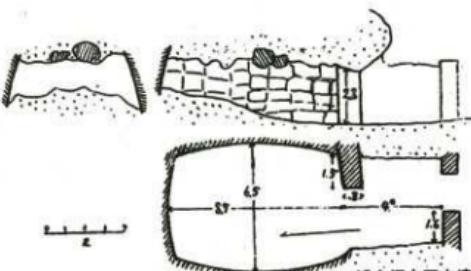
当該地域は発掘調査例が少なく、

古墳時代の集落跡の様相が不明であるため、古墳を中心に周辺の歴史的環境を概観することにする。

八龍神古墳(1)と同一台地上、北に約0.8km離れた一ノ谷沼を望む台地縁片部に小松氏によって報告された浦向字沼台下に所在する沼台下古墳(2)が所在する。それによれば、胴張り型横穴式石室を埋葬主体部とした円墳で、八龍神古墳と密接な関連のある古墳である(第39図2)。一ノ谷沼の対岸の百戸字前郷には前方部を南東に向ける前方後円墳のふき山古墳(3)が所在する。古墳の規模は全長約33m、後円部径約22m、高さ約3.5m、前方部幅約19m、高さ約3mを測り、馬形埴輪が出土している。この付近には、かつて多数の古墳が存在していたことが知られ、現在、東京国立博物館所蔵の百戸字マイゴオ出土の人物埴輪は轟 俊二郎氏により提唱された「下總型」人物埴輪の典型例(註4)である。また利根川東岸の岩井市長須字宿には前方部を南に向ける全長約40mの前方後円墳、宿古墳(4)が所在する。前方部約23m、後円部径約20mを測り、大部分が開墾によって破壊されているが周溝の一部を遺存している。明治年間に発掘され直刀2、鏡及び土器片が出土したといわれるが、詳細は不明である。この他に、猿島町生子字北向内に円墳の生子古墳(5)、境町伏木字倉内に前方後円墳を含む大塚山古墳群(6)、山神町に2基の円墳からなる桜山古墳群(7)が分布している。また利根川と宮戸川の合流地点付近の旧長井戸沼に面する東岸台地上に南長井戸古墳群



1. 八龍神古墳



2. 浦向沼台下古墳

第39図 全岡八龍神古墳と浦向沼台下古墳 (小松 1922より)

(8)と西岸の微高地上に前方後円墳を含む塚崎古墳群(9)が所在する。さらに利根川と江戸川に挟まれた、北西から南東に細長く伸びる千葉県東葛飾郡関宿町には八幡神社裏古墳(10)、新野井古墳(11)、飯塚古墳(12)などの後期の円墳が分布している。

#### 第4節 墳丘について

現在、八龍神古墳は町指定史跡として保存・整備されている。しかし、墳丘は過去の開墾によって大きく削平され、往時の面影をほとんど残していない。かつては直径約25m、高さ約4mの大型の円墳であったといわれているが、現状では規模を大きく縮小している。なお、今回の調査では埴輪や葺石等の外部施設について確認することはできなかった。先の小松氏の報告の中でも外部施設は存在していなかったと記述があることから、埴輪をもたない古墳であると考えられる。

#### 第5節 横穴式石室について

石室は硬質砂岩を切石積みにした玄門付両袖型横穴式石室である。墳丘の中心部よりやや前方に偏し、南西側に位置している。小松氏の報文によると、もとは三室構造（玄室・前室・羨道よりなるものか）の石室であったとしているが、現在は玄室部分のみを遺存しており、その全容は不明である。石室の主軸方向はN-49°-Eにとり、南々西に向かって開口し、天井石と玄門部の石材を露出している。石室は比較的狭小なもので、壁体は硬質砂岩の切石を互に積みにして、切組手法を隨所に用いて構築している。玄室の平面形は両側壁が外側に向かって弧を描く、所謂胴張りプランを呈し、天井部は四壁の持ち送りの強い、精巧な穹窿状を呈する特異な構造のものである。石室の内部にはかなりの土砂が流入しているため正確な計測値は得られなかつたが、今回の調査の結果、石室の規模は次の通りである。

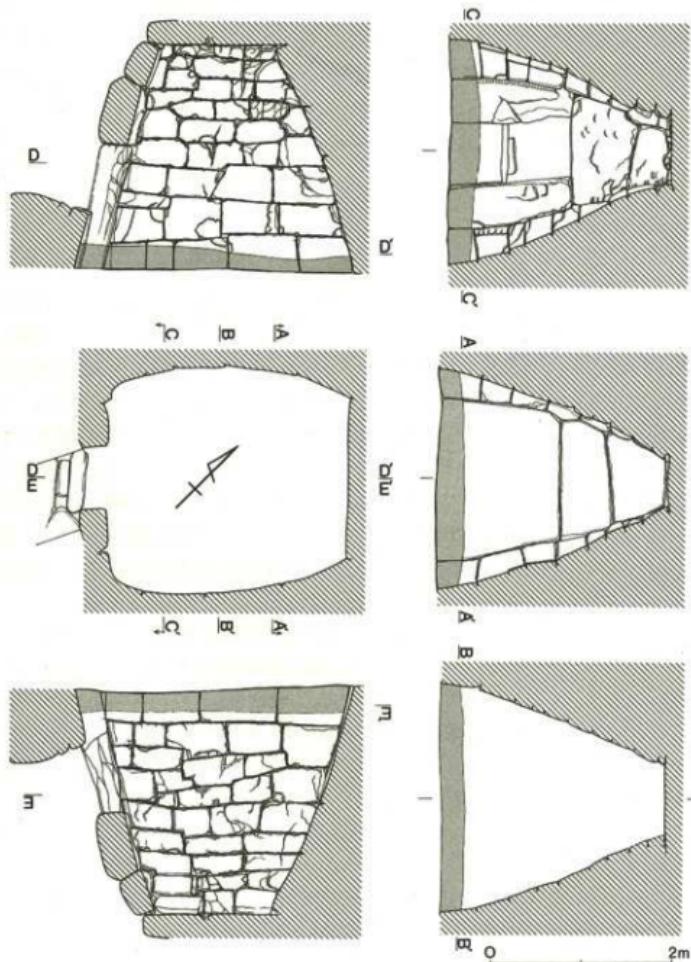
玄室長は主軸線上で玄門石の外側まで2.95mを測る。奥壁幅は1.64m、前壁幅は2.08mを測る。玄室最大幅は奥壁より1.60mほど前方に有し、2.46mを測る。玄室の高さは流入土のため正確には計測できないが推定で2.45mを測る、大きさのわりに天井部の高いものである。次に、石室の各壁体の状況について見てゆくことにする。

奥壁は大型の石材を3段積みで構成されている。最下段の石材は1.64×1.36mの矩形を呈する巨石で、傾斜角約73度を有して立ち上がる。2段目の石材は長方形を呈するもので、平積みをしている。傾斜角は約68度を測る。最上段の石材は台形を呈し、傾斜角約62度を測り、上方にいくほど前方に強くせりだしている。天井石と接する部分の隙間にには挙大の河原石を充填している。奥壁と側壁の接合状況は、側壁が奥壁を挟みこむというよりも、基本的には側壁にもたせかけるようにして奥壁を据え置き、安定した壁面を構成している。

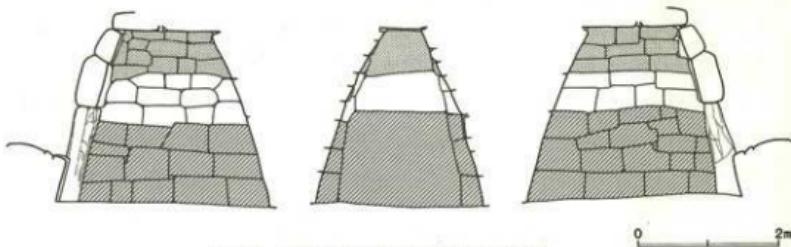
側壁に用いられている石材は、奥壁に比べ加工しやすい砂岩を直方体に加工して使用している。右側壁は、一部にコンクリートによる補修がなされているが、良く遺存している。全体に8~10段に積み上げている。L字状の切組は7箇所ほど確認され、使用石材が小さいためか全体に小さな切

組を施している。最下段は4石からなり、玄門柱石に接する部分の石材は強いカーブを描いて1石でコーナー部を構成している。

左側壁は良く残り、全体に8~9段に積み上げている。下から3段目までは比較的大きな石材を用いており、上方にいくほど小振りの石材を用いている。L字状の切組手法は4箇所ほどに認められる。最下段は5石からなり、玄門柱石に接する部分の石材は右側壁同様、強いカーブを描いて1石でコーナー部を構成している。両側壁には、3段に構成された奥壁に対応して横目地の通る部分



第40図 金岡八幡神古墳横穴式石室実測図



第41図 金岡八龍神古墳石室構築過程模式図

が認められ石室構築過程の工程を示している。すなわち奥壁1段目の石材の上面から玄門石上部に至る横目地で、左右両壁共基本的に3~4段に積み上げている。次に奥壁2段目の上面から冠石に至る横目地がみられ、右壁は2段、左壁は3段に積んでいる。さらに、その上部に両壁共3段程積み上げて天井石を架構している。このように大きく3工程に区分することができる(第41図)。

両側壁とも最下段の石材のみを垂直に置く以外、順次持ち送りしながら積み上げている。傾斜角は上部にいくに従って大きくなっている。傾斜角の変換点は、側壁の横目地の通る部分に一致していることから、その変換点は石室構築過程の工程を示しているものと考えられる。側壁を構成している直方体の切石は、壁内側面を側壁の胴張りのカーブに合わせて滑らかな湾曲を描くように手斧状の工具を用いて削り落とされている。さらに側壁の持ち送りに合わせて壁面を斜めに削り落として、穹窿状の天井部を作り出している。

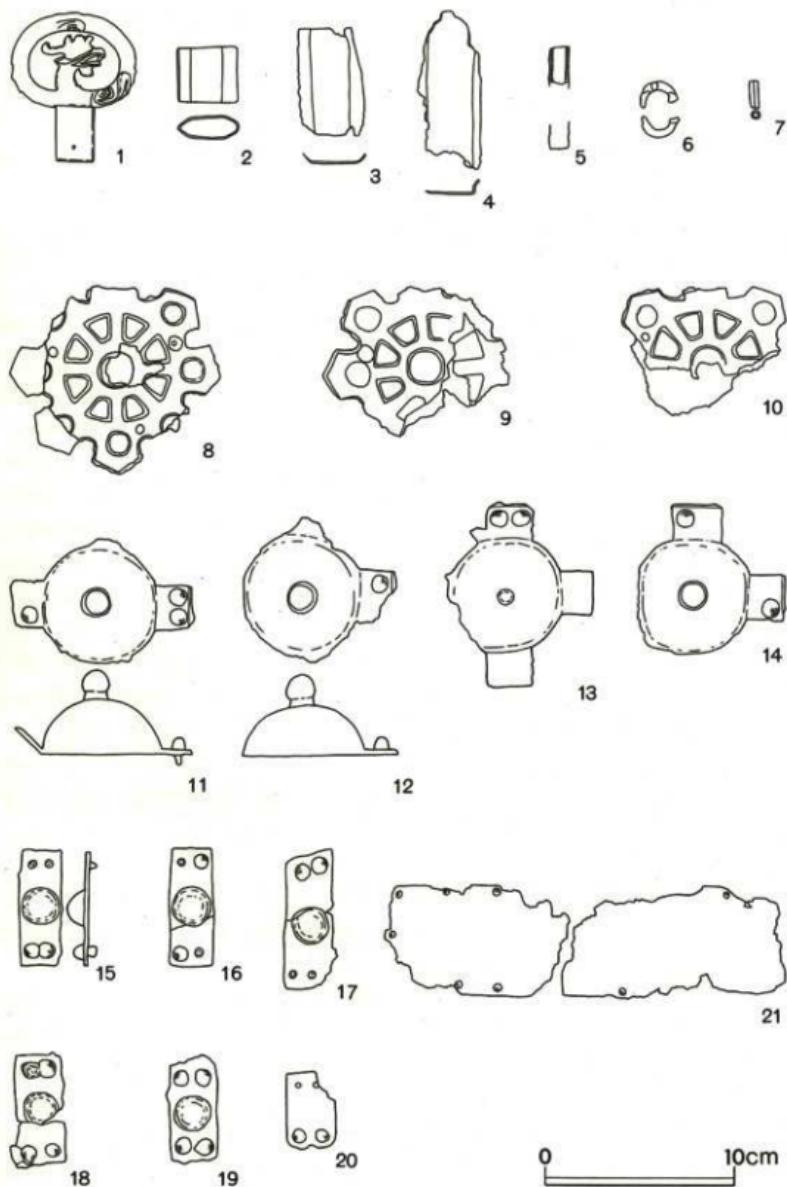
前壁は直方体を呈する玄門柱石によって形成された袖部とその上部に架構された冠石によって構成されている。玄門柱石は玄室側に内傾させて据え置き、玄門幅0.66m、玄門高1.34mを測る。玄門石と側壁の接合部分は側壁のカーブに合わせて加工を施している。天井石は2石からなり、ほぼ水平に架構されている。

玄室の前方は既に破壊されているため、本来の石室構造は明確でないが玄門柱石に接してかなり大型の石材が埋没していることが確認された。

## 第6節 出土遺物について

明治42年に発見された出土遺物は、現在東京国立博物館に所蔵され、「東京国立博物館図版目録 古墳遺物編(関東I)」(註5)によって、その概要を知ることができる(第42図)。

1. 単鳳環頭大刀 (1~5) (1)の環頭柄頭は金銅製のもので、環内には口先を開かず玉を噛む鳳凰の頭部を表現している。環体にはやや単純化された竜文が浮彫風に施されている。総長8.0cm、環の長径6.7cmを測る。環内の鳳凰は口にくわえた玉や頸ひげの表現がまだはっきりしており、目・耳なども明瞭である。頭頂の三本の冠毛は互いにくつついでいる。角は先端があまり巻き上がりずに弓なりとなっており、環体にはつながっていない。刀身は腐蝕が著しく細片になっている。他に刀装具としては金銅製の筒金具(2)と鞘金具(3・4・5)の断片が遺存している。筒金具は断面八角形を呈し、長さ3.0cm、径3.2×1.2cmを測り、稜が明瞭に残る。鞘金具には両側に平行沈



第42図 金岡八龍神古墳出土遺物（『茨城県史料』考古資料編古墳時代 1974より）

線を打出した貴金属と魚々子文を打出した飾金具の破片が認められるが、遺存状況が悪く、装具の全体については不明である。

2. 金環 (6) 折損して現在2片となる。径 $2.2 \times 1.9$ cmを測り、端部の金箔が剥離している。

3. 管状金具 (7) 鉄製のもので、長さ1.4cm、径0.5cmを測り、合せ目が明瞭である。

4. 銅 図示していないが、青銅製銅が2点出土している。外径7.4~7.6cm、径0.5~0.6cmを測り、断面円形を呈する。

5. 馬具 (8~20)

a. 鉄地金鋼張 杏葉 杏葉は4個体分程出土している(8~10)。金銅板に浮彫りを施し、鉄板に鋲留したもので、中央に円形その周囲を取り巻くように8個の台形、さらにその外側に7個の円形が浮彫りされ、その内に対応するように山状の突起筋があり7個ある。欠失した1箇所に円のない所があり、恐らくその部分が長方形の立間になるものと思われる。現存部分の長さ10cm、幅11.3cm。

b. 鉄地金鋼張 金具 頂部に球状の宝珠飾をもつ半球状金具(11~14)で直径6.3~6.5cmを測る。鉢部には棱や腹部の凹線は認められない。四方に方形の脚部を配し、脚部にはそれぞれ2筋の飾筋が打たれる。

c. 鉄地金鋼張 飾金具 飾金具には半球付長方形飾金具(15~19)と半球状の飾をもたないものの(20)の2種が少なくとも存在する。半球付長方形飾金具は最長のもので長さ7.6cm、幅2.4cm、高さ0.8cmを測る。中央部に半球状の飾を作り、両端に2筋の飾筋を打ってある。(20)は、長さ4.0cm、幅2.5cmを測り、一方の端部に切り込みがみられる。

図示していないが、この他に馬具としては轡・鞍・鉗具が出土している。轡は引手・銜の一部が出土し、環状の引手壺がみられる。破片となっているため、形状については明確でないが、恐らく鉄製環状鏡板付轡と推定される。鞍は全長8.7cmを測る鉄製の指針のない形式のもので、花形座を遺存している。

6. 金銅製飾板(21) 金銅製の飾板は幅5.6cmを測り、上・下端に金銅筋を打っている。この飾板の用途や性格については明確でないが、伴出遺物が馬具のみであることから馬具の飾金具か、あるいは全く別の帶状に巻いた冠とも考えられる。

7. 鉄鐵 図示していないが、短茎の三角形式のものと、鑿箭式のものがみられる。

これらの遺物の出土状況について詳細は不明であるが、小松氏の記述によれば環頭大刀・金環・鉗は玄室から、馬具は前室から出土したようである。なお、玄室にはかつて奥壁に接して棺座状の石床が存在していたと伝えられている。

単鳳環頭大刀の出土例は、茨城県内では他に県北部の常陸太田市幡山12号墳(註6)がある。幡山12号墳出土の単鳳環頭大刀は、八龍神古墳例に類似しており、同系列の作品と想定されるが、冠毛が互いにくっつきはじめ、やや退化しており、八龍神古墳例よりも後出するものと考えられる。八龍神古墳出土の単鳳環頭大刀は、鳳凰が口に噛む玉や頸ひげなど細部の表現がまだはっきりしており、冠毛があまりくっつかず、角の先もまだ環とつながっていないなどの特徴から新納 泉氏の単龍・単鳳環頭大刀の編年のⅢ・Ⅳ式に相当する(註7)。また、穴沢呼光・馬目順一氏の編年では含玉単鳳環頭柄頭の字洞ヶ谷系列に属するものと考えられ、その第3段階の新しい時期に該当する。

年代は6世紀第Ⅲ四半期頃に位置付けられている(註8)。

次に、馬具についてであるが、出土した杏葉は類例に乏しい特異な文様・形態のもので、比較検討が困難である。しかし、全体的な特徴から九曜文杏葉との類似性を指摘することができる。また立開部分を欠失しており明確でないが、立開には鉤金具をかける孔がなく、銛留によるものと考えられ、後出的要素が認められる。半球状辻金具は腹部に凹線を施さず、四方に方形脚を配し、革帯との接着は資金具を用いて飾錠で留めていることから、後出的な様相を示す。これらの特徴から八龍神古墳の馬具は6世紀末から7世紀初頭頃の所産と推定される。

このように出土遺物のうち単鳳環頭大刀が6世紀第Ⅲ四半期、馬具が6世紀末から7世紀初頭頃の年代が推定された。両者の年代観には若干の開きが認められ、今後更に検討しなければならないが、今のところ八龍神古墳の築造は6世紀後葉を中心とする年代が妥当と考えられる。

### ま と め

八龍神古墳は硬質砂岩を用いた切石積横穴式石室を埋葬主体部とする直径約25mの円墳で、出土遺物の検討から6世紀後葉に築造されたものと推定された。この時期は自然石を用いて構築された横穴式石室にかわって、凝灰岩・砂岩などの加工石材を用いた切石積横穴式石室が関東地方の各地に出現し始める時期であり、各地域ごとに複雑な様相を示している。八龍神古墳の石室は四壁の持ち送りの顯著な穹窿状の天井構造の胴張りプランを呈する特異なものである。しかし、玄門柱石の設置、L字状加工による切組技法、コーナー部の加工技法など、周辺地域の切組積石室にも同様の構築技法が採用されており、相互に密接な関連を有して展開した状況が想定される。とりわけ利根川下流域に位置する千葉県香取郡小見川町の城山6号墳(註9)の横穴式石室との類似性が認められる。城山6号墳の石室にはまだ奥壁に大型石材の使用がみられず、八龍神古墳より先行するものと考えられ、伝播ルートを明示している。

今後は周辺地域の切石積石室との比較を通して相互の構築技術の系譜関係を明らかにし、関東地方における切石積石室受容期の様相を解明してゆきたいと思う。

(大谷)

### 《註》

- 1 和田千吉「下総國金岡発掘の古墳」『考古界』第8篇第5号 1909年
- 2 和田千吉「下総國金岡発掘の古墳」『考古界』第8篇第12号 1910年
- 3 小松真一「下総國に於ける或三四の石室古墳」『人類學雜誌』 第37卷第4号 1922年
- 4 森 俊二郎『埴輪研究』第1冊 1973年
- 5 東京国立博物館『東京国立博物館図版目録』古墳遺物篇(関東1) 1980年  
茨城県史編さん原始古代史部会「茨城県史料」考古資料編 古墳時代 1974年
- 6 大森信英ほか「幡山跡遺跡発掘調査報告書」常陸太田市教育委員会 1977年
- 7 新納 泉「單竜・單鳳環頭大刀の編年」『史林』第65卷第4号 1982年
- 8 穴沢洋光・馬目順一「單竜・單鳳環頭大刀の編年と系列—福島県伊達郡保原町愛宕山古墳出土の單竜環頭大刀に寄せて」『福島考古』第27号 1986年
- 9 市毛歎・多宇邦雄「千葉県香取郡小見川町城山発見石棺群と城山6号墳の調査」  
『古代』第58号 1974年

## 研究紀要 第5号

1989

平成元年3月25日 印刷

平成元年3月31日 発行

発行 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒331 大宮市桜引町2-499 048-652-2231

印刷 新日本印刷株式会社